

教職大学院

Newsletter

No. 74

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2015.6.26

実践し省察するコミュニティ

実践研究 福井ラウンドテーブル

2015 Summer Sessions 特集号

実践し 省察する コミュニティ

Round Tables:
Summer Sessions 2015
for Reflective Practice
and Organizational Learning
in University of Fukui

For Communities of Practice and Reflection, since 2001

実践研究 福井ラウンドテーブル

2015 Summer Sessions

6/26(fri) 17:30-18:40

6/27(sat) 12:40-17:40

session0 10:00-11:30

6/28(sun) 8:20-14:00

福井大学総合研究棟V (教育系1号館)
/AOSSA

探究する学びを実現する教師
教師を支える教職大学院
教師の実践力を培う学校拠点の実践研究

学校と大学/
実践と研究を結ぶ
新しい実践研究組織とそのネットワーク

2015.6.26-28

教師教育改革コラボレーション/福井大学教職大学院

大学院教育学研究科教職開発専攻
共催 福井大学高等教育推進センター・教育実践研究フォーラム・社会教育実践研究フォーラム

内容

実践研究 福井ラウンドテーブル

2015 Summer Sessions 特集号の発行にあたって (2)

実践し省察するコミュニティ

実践研究 福井ラウンドテーブル

2015 Summer Sessions 内容と構成 (3)

ラウンドテーブル

実践し省察するコミュニティを結び支える (8)

分散型コミュニティへの挑戦

ラウンドテーブルの広がり と 深化 (10)

ラウンドテーブルの歩み 2001.3-2015.3 (11)

教職大学院 Newsletter No.1 より (12)

日本の教師教育改革のための福井会議2008/
学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2008

教職大学院 Newsletter No.71より (17)

実践研究 福井ラウンドテーブル

2015 Spring Sessions

『2014年度 教師教育改革コラボレーション報告書
ラウンドテーブルの広がり と 深化』の発行 (28)

ラウンドテーブルによるこそ

実践研究福井ラウンドテーブル2015 Summer sessionsに参加いただき、ありがとうございます。

15年の年、30回近い積み重ねの中でつねに展開し続けているラウンドテーブルですが、大切にしていること、願っていることは変わりません。実践の長い歩み、そのプロセスをじっくり語り、聴き合い、互いに問い深める時間と空間を生み出したいということです。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

それぞれの分野では、固有の技術や言葉や型を彫琢していますが、実践のプロセス、それを通した実践者としての学習と成長の道筋に関心をもって聞くならば、そこには分野を超えて共有できる、されるべき実践の中での知とその成長のストーリーが紡がれていることに気がきます。そして、そこで捉え返され共有される長い実践展開のストーリーが、次の自他の実践の展開を支えるフレームとして生きて働いていくことを実感してきています。その時ラウンドテーブルは、一過性の集会ではなく、それぞれの実践のコミュニティでの営みとその意味を問い返し、その持続と発展を支える省察的なコミュニケーションのためのメタコミュニティとして働き続けていることとなります。

こうした省察的なコミュニケーションとそのコミュニティを通して、地域を越え分野を超え、しかもそれぞれの分野の実践の長い展開に根ざした協働探究の可能性がひらかれるならば、それぞれの実践の蓄積と多様性を活かしたパブリックなコミュニケーションを編んでいく可能性につながっていくのではないかと。それは公教育(Public Learning)とその理念への問いと、それぞれの持ち場での日々の実践との見失われた環を問い直す、編み直すプロセスにもつながっています。その問いは、教育学部・教職大学院の存在する根本的な理由に根ざしています。

プレセッションから多様なサイクルの積み重ねを通して、互いの実践の展開を跡づけ、意味を共有し、次の展開へと視界をひらいていく3日間にできたらと思います。

語り手以上に聴き手の力が問われるラウンドテーブルです。今回もまたセッションを通してプロセスを追う力を培っていきたいと思っています。どうかよろしくお願い致します。(柳沢)

実践研究 福井ラウンドテーブル 2015 summer sessions

6/26(fri) *Pre-session* 17:30-18:40

福井大学教職大学院のこれまでといま

6/27 (sat) 12:40-17:40

session0 10:00-11:30 子どもの追初心を大切にした理科学習の創造

orientation 12:40-12:50 学校・教育・地域を考える4つのアプローチ

A 学校:子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ

B 教師:21世紀の教師教育をイノベーションする

C コミュニティ:学び合うコミュニティを培う (会場:福井駅前AOSSA)

D 授業づくり:どうしたらできるの?~アクティブラーニングを考える~

session I 12:50-13:50 実践に学び合う広場 実践の広がりに出会う **knowledge fair**

session II 14:00-15:20 課題の提起 方向性を探る **symposiums**

session III 15:30-17:40 テーマ別話し合い 問いを深める **forums**

6/28(sun) 8:20-14:00 *SessionIV* **round table cross sessions**

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

①はじめに 8:30-8:40 ②自己紹介 8:40-9:00 ③報告Ⅰ 9:00-10:40 ④報告Ⅱ 10:40-11:40 ⑤報告Ⅲ 12:20-14:00

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体(コミュニティ)に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

Zone A 学校

子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ

/子どものこと、授業のことを語り合える組織づくり

これまでZone Aでは「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」をテーマとしてセッションを積み重ねてきました。昨年度6月は“教師のやりがい”をサブテーマに設定し、教員組織において子どもたちの豊かな学びにつながるビジョンを共有することの重要性を再認識しました。しかしそれを現実のものとしていくためには、立場や世代、考え方など教員の間にある様々な違いを越えたビジョンの共有がいかんにして可能なかということについて考えていく必要があります。そこで、昨年度2月のラウンドテーブルでは、「子どものこと、授業のことを語り合える組織づくり」というサブテーマを設定し、子どもたちの豊かな学びを支えるための協働する組織づくりや学校全体のコミュニティの活性化について改めて考えることにしました。このセッションを通して私たちが気付かされたのは、子ども個人に着目すること、日常的に語り合うこと、皆で共にあることといったシンプルな原則でした。

「アクティブ・ラーニング」というスローガンがかつてないほど人々の教育にかかわる言説に現出していく一方で、もしかすると私たちは、言葉の響きにとらわれて日常の現実には潜む無数の可能性を見落としやすくなっているのかもしれない。そうであれば、個別の教育現場で展開されている具体的実践に耳を傾け、自らのあり方と照らし合わせ、そしてその気づきを人々と共有していくことが、これまで以上に必要になってきていると言えるのではないのでしょうか。

そこで私たちは、今回のラウンドテーブルにおいても前回のサブテーマを継続しつつ、改めて「子どものこと、授業のことを語り合える組織づくり」を個々の学校の現実に根ざして考えること、そしてそれを参会者の皆様と共有することを通して、子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティの可能性について、より検討を深めていければと思っています。

12:40-12:50 orientation

Session I 12:50-13:50 poster session

福井県内外の小学校・中学校・高校・特別支援学校から、子どものこと、授業のことを語り合える組織につながる学校づくりの実践についてポスター報告が行われます。ポスター報告にもとづき、各学校及び参会者で互いの実践を交流します。

Session II 14:00-15:50 symposium

「子どものこと、授業のことを語り合える組織づくり」について、そのプロセスをシンポジストに報告いただき、コメンテーターを通して、参加者の皆様とともに、実践の意義について考えていきます。

〈シンポジスト〉 栃川 正樹（福井市豊小学校教諭）
高嶋 和代（福井市安居中学校教諭）
鮫島 京一（奈良女子大学附属中等教育学校教諭）

〈コメンテーター〉 千々布敏弥（国立教育政策研究所教育研究情報センター総括研究官）

〈コーディネーター〉 森田 史生（福井大学教育地域科学部附属中学校教諭）

Session III 16:00-17:40 forum

Session I と II を受け、参会者で小グループをつくり、それぞれの立場や背景を基盤として「子どものこと、授業のことを語り合える組織づくり」について議論し、実践を共有していきます。すべての参会者の皆様が日々、感じていることや悩んでいることについて、本音を交えてじっくりと語れる場にしたいと考えております。

Zone B 教師

21世紀の教師教育をイノベーションする / 『チーム学校』を支える教師教育～教職大学院の成果を問う～

Zone Bでは、生涯にわたる教師の職能成長を支える教師教育という視点から、前回に引き続き「21世紀の教師教育をイノベーションする」をテーマとし、「チーム学校」を支える教師教育と、教師教育の中核を担う学校・行政・教職大学院の連携の在り方を探っていく。

現在、中教審において、「これからの学校教育を担う教職員やチームとしての学校の在り方について」（平成26年7月29日諮問）の審議がなされている。「チーム学校」は、学校組織全体が一つのチームとして力を発揮していくことであるが、教員と教員以外の者がそれぞれの専門性を連携して発揮することが欠かせない。チームの一人一人が、「各自の専門性を発揮すること」はもちろん、「他者との連携」を実現する力量を養うことも求められている。

一方、政府の教育再生実行会議の「これからの時代に求められる資質・能力と、それを培う教育、教師の在り方について」（平成27年5月14日第7次提言）においては、「国や地方公共団体、大学等が協働して、教員がキャリアステージに応じて標準的に習得することが求められる能力の明確化を図る育成指標」や「教師の育成指標に基づく研修指針等」を策定するとされている。

このように、一人一人の教師が、主体的、協働的で能動的な学びを展開できる資質・能力を身に付けるために、教員養成・採用・研修の全ての段階において、教職大学院の果たす役割は今後ますます拡大していく。

そこで、今回のZone Bでは、「チーム学校」を実現するために、チームの一人一人が専門職としての資質・能力を伸ばしていけるようにする評価の在り方と、それに呼応する学校・行政・教職大学院の役割について、これまでの成果を踏まえて参会者の皆様方と共に以下のセッションを進める。

12:40-12:50 orientation

Session I 12:50-13:50 poster session

教師教育に関する実践をポスター報告いただき、参会者の皆様方と共に実践を交流します。

Session II 14:00-15:20 symposium

「『チーム学校』を支える教師教育～教職大学院の成果を問う～」

〈シンポジスト〉 茂里 毅（文部科学省初等中等教育局教職員課長）
柳澤 好治（文部科学省高等教育局視学官(命)大学振興課教員養成企画室長）
牛渡 淳（仙台白百合女子大学長／日本教育経営学会会長）
津田由起枝（元福井市立安居中学校長）
〈司 会〉 松木 健一（福井大学教職大学院・教授）

Session III 15:30-17:40 forum

先の2つのsessionを受け、小グループに分かれて参会者の皆様方と議論を進めます。

Zone C コミュニティ

学び合うコミュニティを培う

会場：AOSSA
JR福井駅東口



この間、Zone Cではコミュニティの発展における「持続性」の問題を共有し検討しています。現在私たちが地域や職場で出会う課題は、ある一つの方法や、個人的・個別的な取り組みでは必ずしも解決し得ないより複雑なものへと変化し続けています。地域の発展を支える自治や学習においても、その持続的な展開をどのようにコーディネートしていくかがこれまで以上に問われていると言えます。それは、コミュニティの持続的な発展に向け世代をこえてつながり学び合うことをどのように支えていくことができるのかという課題への挑戦でもあります。

Zone Cは、福井市教育委員会生涯学習室・福井市中央公民館の協力の下、JR福井駅東口前のAOSSAが会場です。地域・世代・領域を超え互いの実践の展開を捉え直し、<人や組織をつないでいくこと>、<世代のサイクル・新しい実践の担い手>、<コーディネーターの力量形成>といった視点から上記の問いを深めていきます。

Session I はポスターセッションです。AOSSAのフロアをまたぐ空間的な拡がりの中にポスターを配置し、それを通じて互いの実践を交流します。Session II のシンポジウムは「持続可能なコミュニティをコーディネートする—多文化共生社会を支える聴くこと・省みること—」と題し、コミュニティの持続的な発展と専門的力量形成を支える傾聴と省察の意義を考えていきます。前回と前々回では「語り・聴く」関係性の中で活動が編まれ、実践がつながり、コミュニティがひらかれていく可能性が確認されました。今回はこれまでの議論を踏まえ、地域のコーディネーターが多文化共生という新たな課題の担い手である実践者達の取り組みを傾聴し共に省察することでコミュニティが編まれていく可能性に注目します。Session III のフォーラムでは、シンポジウムでの問題提起を受けながら6人程度の小グループを組み、地域・世代をこえて互いの活動を交流・共有していくクロスセッションを進めます。

多くの皆様のご参加・ご来場を心よりお待ちしております。

12:40-12:50 orientation

Session I 12:50-13:50 poster session

「世代をこえて学び合うコミュニティをコーディネートする」

福井市公民館 越前市公民館 勝山市公民館 池田町公民館 ふくい市民国際交流協会
福井大学探求ネットワーク 福井大学履修証明プログラム「学び合うコミュニティを培う」
『福井の公民館』 福井学 福井ローターアクトクラブ 市立札幌大通高等学校 他

Session II 14:00-15:30 symposium

「持続可能なコミュニティをコーディネートする
— 多文化社会を支える<聴くこと・省みること> —」

<シンポジスト> 辻端 聡子 (ふくい市民国際交流協会)

高嶋 和代 (長崎外国語大学)

<コーディネーター> 半原 芳子 (福井大学)

田中 志敬 (福井大学)

Session III 15:50-17:40 cross session

— 小グループでの実践交流 —

*6月27日、Zone Cの会場は福井駅東口のAOSSAになります。翌28日の実践研究福井ラウンドテーブルの会場は福井大学文京キャンパスです。ご注意ください。



Zone D 授業

どうしたらできるの？～アクティブラーニングを考える

Zone Dでは、これまで授業にまつわる様々な問いを語り合い聴き合いながら授業改革の扉を開いてきた。子どもの目線から授業を体感し、授業者としていかに冒険できるかを問い直し、授業を駆動する問いはどのように生まれるのかへと問い進め、質の高い学びを生む問いとはどのようなものかを問うに至った。今年春のラウンドテーブルでは、原点をまっすぐに見つめ、「私たちは授業の積み重ね（授業s）の末に何を残したいと願うのか」を聴き合い、語り合う中で、生徒が主体的に学びあうために必要な「解放」と、子どもたちが夢中になって学びあう「教室文化」の創造が授業改革の扉を開く鍵の一つであることを共有できた。しかし、学生から投げかけられた「どうしたらこういう授業ができるのでしょうか？」という問いが残された。

今回は、「どうしたらできるの？～アクティブラーニングを考える～」というテーマで語り合いながら学生の問いについて参加者の皆さんと、質の高い授業作りのためのアクティブラーニングについて考えてみたい。

12:40-12:50 orientation

Session I 12:50-13:50 poster session

「レッジョ＝エミリアの幼児教育から学ぶ」石井希代子（新渡戸文化短期大学）

「福井大学教育地域科学部附属幼稚園の教育」笹川 英理（福井大学教育地域科学部附属幼稚園）

Session II 14:00-15:20 symposium

「学び合う教室文化」を創る校内研修の在り方

〈シンポジスト〉 本橋 和久（牛久市立ひたち野うしく小学校）

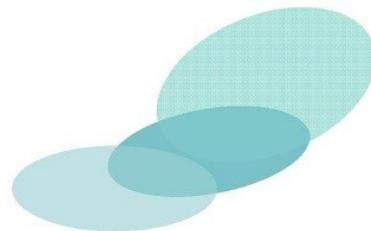
〈ファシリテーター〉 小林 和雄（福井大学）

Session III 15:30-17:40 forum

「協働探究型の授業」で生徒はどう変容するのか

〈シンポジスト〉 永廣 裕子（福井市至民中学校）

〈ファシリテーター〉 富永 良史（福井大学）



ラウンドテーブル 実践し省察するコミュニティを結び支える



2009.3.26

地域も職種も異なる実践者・実践研究者が集い、小グループに分かれてテーブルを囲み、5時間近く互いの実践を跡づける報告に耳を傾ける。語られる実践の展開を追走しながら、時々の実践者の判断や配慮、実践を支える条件に問いを進める。聴き手の問いに応え、語り手は実践の状況とそこでの思考を改めて思い起こし、それを表す言葉を模索しながら語り進めていく。聴き手もその展開に学びながら、関連する自らの実践とそこでの経験・思考を語り始める。それぞれの経験が照らし合うことによって共通する構造とそれぞれの特色が浮かびあがる。

少人数で、しかも多様な専門職が集って一緒に実践の長い展開を跡づけ直すこの研究会（実践研究福井ラウンドテーブル、以下ラウンドテーブルと略す）の構成とその意味について、この会に最初から関わってきたものの一人として改めて考えてみたい。

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

一つの授業、一つのプロジェクトも、それが生み出される背景と、それが生きて働く作用の行方まで視界に入れようとするならば、はるかに長い前後の展開を跡づけることが必要となってくる。とりわけ学習者の成長のゆるやかなプロセスを焦点とする教育実践においては、そうした長い展開から目を逸らす訳には行かない。

しかし、個々の授業や実践の検討は数多く重ねられ、また他方でもより長いライフストーリーの跡づけもまた重ねられてきてはいるが、その間にある実践の持続的な展開、実践と実践の間にある調整と成長の長いプロセスへの問いは課題のままに残されてきた。たしかに、そうならざるを得ない理由がいくつも存在している。実践をともに担っているもの同士では、つねにその状況の中にいるために、問題や課題については話し合ったとしても、実践の展開と状況を子細に語る必要性が存在していない。逆にその実践の外にいるものは、その実践から学ぼうとする場合であっても、自分の実践にすぐに活かそうような具体的な手がかりを求めがちである。そして「外から」実践に迫ろうとする「研究」は、実践の持続に見合うだけの方法も枠組みも組織も準備しえていな

い。長い実践の脈絡、そこにある成長のプロセスとそれを支える編成を探るためには、これまでにない実践交流の場・実践の内と外を結ぶ新しい協働の省察の場を生み出していく必要がある。実践の歩みを振り返り、その展開を跡づけ、一人ひとりの成長、自身の実践者としての歩みを問い直そうとする語り手と、その長い展開からより深く学び取ろうとする聴き手が会う場が必要となる。ラウンドテーブルは、実践に関わる一人ひとりがそうした語り手となり、聴き手となる場を拓こうとする問い組みとして始まる。

実践と省察のサイクルとその交流の場

長い実践の展開を省察し検討することは、日々の仕事に追われるお互いにとっては容易に実現できることではない。実践の場において、実践の展開を語り合い省察するコミュニケーションを持続的に進めていく、専門職として学び合うコミュニティ（Professional Learning Communities）の実現が中心的な課題となる。そうした実践の場での省察を支えるために、福井大学教職大学院では学校拠点での実践カンファレンスを中心に据えている。そしてそうした学校での取り組みを踏まえ、月一回の合同のカンファレンス、実践を語る会を重ね、また半年ごとに集中的に実践の展開を記録化して検討する時間を作っている。月を追って、そして半年、1年、2年とそれぞれの取り組みの足取りを確かめていくなかで、それぞれの実践者の、そしてそれぞれの職場の固有のリズムで、ゆるやかに、ときに劇的に実践が展開していくことを実感し合うことになる。時々の実践の記録やカンファレンスでの語らいを、1年、そして2年と積み重ね、その記録を、長期にわたる実践の展開過程として改めてその道行き（trajectory）・脈絡を検討し直して行くなかで、厚みのある実践の現実の展開がようやく見えてくる。あれができないこれが足りないとその時々課題を追っている目には見えない、同じところを回っているようにしか見えない実践サイクルの中にある小さな傾斜が、長い時間の展望の中でとらえ直した時に、ゆるやかな展開として像を結んでくる。自身の見方や考え方の深まり、実践の基盤にある共同関係の展開も、そうした長期にわたる展開の中にはじ

めて浮かびあがってくる。

しかし、長期にわたる実践省察の意味が、その渦中では実感し難いという現実には動かしがたい。そうした暗中模索の中での実践と省察を支えるためにも、実践をともに歩み語り合う仲間とともに、長い実践の展開の価値を、より広い見地からより鮮明に確かめ直す場が、どうしても必要になってくる。ラウンドテーブルは、実践展開の価値をより広い視点から確かめ直す場として、実践の場での省察、そして大学院での長期的な実践研究を支える重要な支柱となっている。実践と研究の表明の場のゆたかさ、あるいは貧困さは、それが実践の真価を問う場の一つとして働くがゆえに、日々の実践と研究の深まりを支え、逆に拘束することにもなる。交流・表明の場のあり方、その構成が問われることになる。

小グループでの共同探求と開かれた交流を結ぶ

地域を越えた実践交流はこれまでも様々な組織によって取り組まれているが、交流の広がり確保と実践の探究の深まりとは、相反する要求であることもまた確かである。ラウンドテーブルは交流と探究を両立する形を模索する中で生まれてきた。いくつかの特徴的なセッションの構成がここでは取られている。

- ①実践の長い展開を語り、聴くことを中心に据える。
- ②そのために実践の展開を語り跡づけることの出来る時間を確保する。(1報告60-100分)
- ③実践の展開について問い交わしながら共同探求できる少人数のグループを設定する。(6名程度)
- ④グループには多様な地域・分野の実践者・研究者が加わり、個々のコミュニティを越えたメンバーで実践を共有し跡づける。(学校教育・社

会教育・看護・福祉・保育・自治・企業 ほか)

- ⑤小グループは個別の部屋に分かれず、他のグループと広場を共有した状況の中で進める。

多様な地域・領域のメンバーが加わったセッションでは、自分たちが当たり前の前提にしていたこと、重要ではあってもその領域ではだれもが共有しているが故に明確に説明することを要しない前提を改めて語る必要が生じてくる。領域を越えた、しかも実践への問いを持つ人たちに伝える言葉を探る経験は、それぞれの専門職がパブリックな表現を鍛えていく機会として重要な意味を持つことを、ラウンドテーブルの実際の積み重ねを通して私たちは実感してきている。ラウンドテーブルというセッションは、各自の領域をクロスして実践を問い深めるチャンスとなり、そして専門家の文化をパブリックなコミュニケーションと結ぶ可能性を持っている。

パブリックなコミュニケーションという課題 持続を支える記録と機構

公共的なコミュニケーションと個別のコミュニティの価値を結ぶという大きすぎる課題は、しかし、民主社会における専門職、とりわけ公教育を担う専門職にとって避けて通ることの出来ない課題である。理念としてのみ語られることの多いこの課題に、ラウンドテーブルは、実効性のある手がかりを与える可能性があるのではないか。語り合う34の小さな渦、そこでの語らう声が輻輳する広場に一人の当事者として参加しながら、そして20名余の小さな実践交流からはじまったラウンドテーブルの9年の展開を振り返りながら、そう考えはじめています。

(柳沢 昌一『教職大学院ニューズレター』
No. 11, 2009. 3. 31)

ラウンドテーブルの4重の意味

4Dimensions of Round Table Cross Session for Reflection in and on Longitudinal Process of Practice

- I 長い実践の展開をともに跡づけ、省察する。
Co-reflection in and on longitudinal process of practice
- II 個々の実践コミュニティを超えて、実践の展開を探り、照らし合う。
Boundary crossing collaborative inquiries of longitudinal practice
I II → 省察的実践者としてのモードを形成する上で不可欠のサイクル
- III 実践と実践、分野と分野を結びパブリックな省察的コミュニケーションの文化とコミュニティを培う。
Cultivating Communities of Public and Reflective Learning
- IV 省察的実践者としての専門職学習コミュニティを支える省察的機構へのチャレンジ
Challenge for Reflective Institution for Sustainable Development of Professional Learning Communities for Reflective Practitioners

分散型コミュニティへの挑戦 ラウンドテーブルの広がり と 深化



2001年3月、約20名の実践者や研究者が集まり、「教師の実践的力形成をめざして」というテーマのもとで互いの教育実践と教育実践研究を交流し合う研究会が催された。ここで放たれた熱き議論が「実践研究福井ラウンドテーブル」の産声である。それから14年間もの間、「実践研究福井ラウンドテーブル」は福井県内外と国内外のコミュニティとの往還を絶え間なく積み重ねながら、21世紀の教育を支援するための実践コミュニティを真摯に耕し続けてきた。このたゆまぬ挑戦と努力の成果として、会を重ねるごとに「実践研究福井ラウンドテーブル」への参会者の増加が挙げられるとともに、参会者による実践報告の内容や質の多様化が挙げられる。「実践研究福井ラウンドテーブル」の創世記には少数の実践者の報告のみだったが、現在では研究者も自らの「実践」を報告し、さらに地域コミュニティの人々も自らの取組とその実践的意味を探究するために実践報告を行うようになった。この間、国際的な教育研究の前進を足がかりとしながら、教育の質保証と学びの転換を目指す多種多様な教育改革の施策や取組がなされてきた。その全ては、21世紀の知識社会に生きる子どもたちの幸せを保証するための挑戦であり、子どもたちの成長を支える全ての教育関係者の実践を支えるための挑戦である。「実践研究福井ラウンドテーブル」はこれらの挑戦を促し支えるための省察的機構としての実践コミュニティである。

省察的機構としての実践コミュニティは、そのコミュニティに参加するメンバーの文字通り「実践の省察」を促し支えることをビジョンとする。このビジョンを基盤とした「実践研究福井ラウンドテーブル」には、日本全国や世界各地から多数の実践者や研究者が集まる。当然、彼ら／彼女らは「実践研究福井ラウンドテーブル」とは異なるコミュニティ、あるいは複数のコミュニティに属しており、それぞれのコミュニティ内でイノベーションを生み出す実践に挑戦している。つまり、「実践研究福井ラウンドテーブル」はローカル・コミュニティが集合する大きな、コミュニティの「坩堝（るつぼ）」なのである。もしも、このコミュニティの中で数多あるローカル・コミュニティが有機的に結びつき、そこ

でコミュニティ間の相互作用が加速化すると何が起きるのだろうか。それはおそらく新たな「知」の創発であり、新たな「かかわり」の生成であろう。これら新たな「知」や「かかわり」のダイナミクスが大きくなるほど、現代社会を取り巻く困難や格差を突破するためのいくつかの「解（ソリューション）」が生み出される可能性が高まる。ただし、このダイナミクスを大きくし、このダイナミクスの質を深化させるためには「戦略」が必要になる。ただ指をくわえて待っているだけではダイナミクスやイノベーションは起こらないのである。

福井大学教職大学院はこれまでの「実践研究福井ラウンドテーブル」で結びつきを強めたいくつかのコミュニティと連携し、「分散型コミュニティ」の設計に着手し始めた。日本全国そして世界各地にあるコミュニティの相互作用と化学反応を生み出すためには、複数の境界をまたいでメンバーが学び合うことが可能な「分散型コミュニティ」を設計することが肝要である。複数のローカル・コミュニティが共通の理念やビジョンのもとで「実践し省察するコミュニティ」に昇華することができれば、そこで互いの課題や問題を同定し、それらの解決策を考案し、共有可能な「知」を蓄積することが可能になる。「分散型コミュニティ」への挑戦とはつまり、「グローバル・コミュニティ」を築くための挑戦なのである。

2014年度には福井大学教職大学院との連携協働に基づき、長崎、大阪、静岡、東京、宇都宮、福島で共有された理念とビジョンに基づく「ラウンドテーブル」が開かれた。この「ラウンドテーブル」の広がり各地で放たれた息吹は、日本の教育実践を支える新たな「省察的機構としての実践コミュニティ」の産声である。そしてこの実践コミュニティの足音はすでに様々な地域で共振している。この実践コミュニティは、おそらく日本の教育界ではじめて戦略的に組織化された「分散型コミュニティ」であり、今後数年あるいは十数年で「グローバル・コミュニティ」へと深化・進化することだろう。

(木村 優『2014年度 教師教育改革コラボレーション報告書 ラウンドテーブルの広がり と 深化』2015.3.31)

実践研究福井ラウンドテーブルの歩み 2001.3-2015.3

- 2001.3.17-18 春のシンポジウム ラウンド・テーブル 教師の実践的力量形成をめざして
木岡一明・寺岡英男（この回は教師教育をめぐる20人程度の研究会であり、実践を聴き合う会ではなかった。）
- 2001.11.10-11 実践研究：福井ラウンドテーブル 省察的実践を支える協働（第1回）
For Reflective Practice, Professional Development, and Organizational Learning. 第1回目の実践研究福井ラウンドテーブルが開催される。（参加者20数名）京都ユースホステル協会 福井市公民館主事 つむぎの会 ゆきんこ共同保育園 福井大学附属小学校 福井大学教育地域科学部児童館プロジェクト・探求ネットワーク
- 2002.3.16-17 実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第2回) 高木展郎・大田邦朗・藤原文雄・石川英志
フレンドシップ事業福井ラウンドテーブル 同日開催 探求ネットワークのラウンドテーブル ～現在に至る。
- 2002.7.13-14 実践研究：福井ラウンドテーブル（省察的実践を生み出す 学び合う組織を編む）（第3回）
- 2003.3.15-16 実践研究・事例研究ラウンドテーブル（第4回）
シンポジウム 教師教育における専門職大学院の可能性を探る 辻野昭・葉養正明
- 2003.7.12-13 実践し省察するコミュニティ 実践研究：福井ラウンドテーブル（第5回）
- 2004.3.13-14 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル（第6回） 秋田喜代美ほか
- 2004.7.3-4 実践し省察するコミュニティ: 実践研究福井ラウンドテーブル2004（第7回）
2004.8 教育のアクションリサーチ研究会が始まる（於熱海～2009）
2005.1 実践研究東京ラウンドテーブル始まる（於早稲田大学）～現在に至る。
- 2005.3.5-6 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2005（第8回 参加者100名超）
国際シンポジウムAnn Liebermann 横須賀薫 佐藤学 於国際交流会館
- 2005.7.9-10 実践研究福井ラウンドテーブル2005（第9回）
- 2006.3.4-5 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2006 フェニックス・プラザ（第10回）
田中孝彦・石川英志・新田正樹・上野ひろ美・白益民・松木健一・牧田秀昭
- 2006.7.1-2 実践研究福井ラウンドテーブル2006（第11回）三輪建二・倉持伸江・松木健一・水野篤夫
兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
- 2007.3.3-4 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2007（第12回）渡邊満・無藤隆・松木健一・新田正樹
2007.4 福井大学教職大学院の準備期間が始まる。
- 2007.6.30-7.1 実践研究福井ラウンドテーブル2007（第13回）藤本 寛巳・淵本幸嗣・寺岡英男
- 2008.3.1-2 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2008（第14回）横須賀薫・新田正樹・松木健一・Jae-Hoon Yu
- 2008.6.28-29 実践研究福井ラウンドテーブル2008（第15回）人見久城・筒井潤子・寺岡英男・岸野麻衣・向当誠隆
- 2009.2.28-3.1 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2009（第16回）稲垣忠彦
- 2009.6.27-28 実践研究福井ラウンドテーブル2009（第17回）5つの領域：専門職として学び合うコミュニティ（分野ごとのセッション始まる）
- 2010.2.27-28 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2010（第18回参加者300名前後）鈴木寛 Catherine Lewis
- 2010.6.26-27 実践研究福井ラウンドテーブル2010（第19回）：学校・コミュニティ・特別支援・医療看護
- 2011.2.26-27 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2011（第20回 参加者300名を超える。）門脇厚司・森透
- 2011.6.25-26 実践研究福井ラウンドテーブル2011（第21回）松本謙一・勝野 正章・木原俊行・三輪建二
- 2012.3.3-4 実践研究福井ラウンドテーブル2012 spring sessions（第22回）(名称を変更する)
- 2012.6.23-24 実践研究福井ラウンドテーブル2012 summer sessions（第23回）参加者450名を超える。
兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
- 2013.3.2-3 実践研究福井ラウンドテーブル2013 spring sessions（第24回）教師教育改革コラボレーションとの共催
- 2013.6.29-30 実践研究福井ラウンドテーブル2013 summer sessions（第25回）
11.30-12.1 実践研究東京ラウンドテーブル2013 winter sessions（明治大学）12.14.21 教育実践研究公開クロスセッション（福井大学）2.8 宇都宮大学学校活性化フォーラム（宇都宮大学）1.25 実践研究ラウンドテーブルin静岡（静岡大学）
- 2014.3.1-2 実践研究福井ラウンドテーブル2014 spring sessions（第26回）参加者550名を超える。
- 2014.6.21-22 実践研究福井ラウンドテーブル2014 summer sessions（第27回）
11.8-9 教育実践研究フォーラムin長崎大学, 11.23 実践研究ラウンドテーブルin 静岡（静岡大学）
11.22 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム, 12.6-7 実践研究東京ラウンドテーブル（明治大学）2.14 宇都宮大学学校活性化フォーラム, 3/7 教育実践福島ラウンドテーブル
- 2015.2.27-3.1 実践研究福井ラウンドテーブル2015 spring sessions（第28回）参加者 700名を超える。



日本の教師教育改革のための福井会議2008／ 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2008

教職大学院の出版を間近にした2008年3月1日と2日、「実践し省察するコミュニティ」をメインテーマとする公開研究会がひらかれました。教師教育のあり方、そして学校での協働研究の展開を、実践を通して探究するこの公開研究会は教職大学院の一年間の実践・省察・研究の要でもあります。この会に全国から、大学教員や院生、教育委員会や学校の先生方など、両日合わせて延べ300名近くが参加しました。Newsletter No.1個のでは、この二日間を通して聴き取ったこと考えたことを共有していく特集が組まれました。

私にとってのラウンドテーブル2008

岸野 麻衣 (福井大学)

3月1～2日の2日間に渡って開催された「日本の教師教育改革のための福井会議2008／学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2008」を振り返って、それぞれのセッションで私が個人的に印象に残ったこと、考えたことを述べたい。

1日目は、教職大学院の設置に向けてこれまで準備を進めてきた過程を見つめ直し、今後の課題について考える機会となった。前半のシンポジウムでは、新田報告において法学等の他領域の専門職大学院の現状が述べられ、設置後の評価によって大学院の存続すら揺るがされるという提言がなされ、今後の行く末の厳しさを身に沁みて感じた。しかし続く松木報告では福井大学の教職大学院の構想が述べられ、最後に「大学の生き残りを考えて行動するのではなく日本の教育をこそ考えるべきである」と提言された。私にとってはこの言葉が非常に印象に残り、厳しい現実の中であっても、目の前の利害にとどまらず教育そのものを考え社会全体を見通した行動が求められていることを改めて感じさせられた。

後半のワークショップでは、「教職大学院スタッフの力量形成」と題して、これまで準備を進めてきた過程で何を学び、何を課題と考えるか、グループに分かれて議論しあった。私自身も福井大学での取り組みを報告し、この1年を振り返る機会となった。福井大学のスタッフは私を含めて今年度着任した教員が多かったことも奏功してか、具体的なカリキュラムなどは全員でアイデアを出し合い、相互作用によって創り出してきた。その過程は率直にいうと「とにかく楽しかった」のだが、1年を振り返り報告する中で、その楽しさの意味がわかってきた。教育背景も職業経歴も異なる多様な視点で意見を交し合う中では、「これでいいのか?」という葛藤が生じることもあったが、垣根を越えてお互いを理解しあい尊重しあいながら新たなカリキュラムや教育方法を考えるうちに、自分自身の枠組みが組みかえられていく面白さが生じていたの

だ。スタッフの間に、学びあいながら協働するコミュニティが生成されつつあると感じ、今後もさらに維持、発展させていくことが課題であると感じるセッションだった。

2日目は、子どもと関わる教師のありようという教育の本質を考えさせられる機会となった。私の参加したグループは、小学校の総合的な学習の実践報告と視覚障害児への長期にわたる援助の実践報告という一見すると異質な報告がなされた。司会の身としては議論がかみ合わなかったらどうしよう…と実は一抹の不安を抱えながら始めたのだが、力量のある参加者に恵まれ、大変深い議論がなされた。両方の実践に共通することとして特に印象に残っているのは、実践の裏側にある厚みである。一見子ども主体に楽しく活動しているように見えて、その裏側には、同僚と共に厳しく何度も作り直してきた指導案があり、子どもと共に時に苦心しながら歩んできた歴史がある。議論の中で「子どもに癒される」という言葉が発せられたのだが、それは単に慰められるという意味ではなく、生き生きと学ぶ子どもを目にする喜びであり、共に学ぶ「同志」のような関係で教師自身の存在が認められる喜びでもあるのではないかと思った。

最後に、今回はラウンドテーブルの運営に携わったことで学んだことも多かった。学会等は研究者の集まり、学校の公開研究会等は実践者の集まりと二分されがちだが、ラウンドテーブルは大学と学校の垣根を越えて、研究者と実践者が対等に机を囲む会であることを感じた。2日間を終えてそれぞれに刺激を受けて活気に満ちた顔に出会うと、この会を行って本当に良かったという嬉しさと、ここから実践も研究も変えていける何かが生じる期待を感じた。運営上至らないところが多々あったことはこの場を借りて御詫びしつつ、様々な立場の先生方の今後のご参加、ご協力をお願いしたい。

わたしの1年とラウンドテーブル2008

松田 淑子 (福井大学)

横須賀薫氏、新田正樹氏、松木健一氏のご報告により、教職大学院の背景や全貌を俯瞰することのできたシンポジウムを皮切りに『ラウンドテーブル2008』がスタートした。

Session I Zone A 教職大学院のスタッフの力量形成 Zone Aには、大学関係者が集まり、5つのグループに分かれ、1グループ10名程度で『教職大学院のスタッフの力量形成』について話し合った。福井大学スタッフの一人として、事前に報告することが決まっていた私は、報告内容を考えるに当たって、自分自身とスタッフ全体の1年を振り返り、どのようなことを経験し、何を学び、どのような成長ができたのかを整理し考察した。つまり、自分自身とスタッフ全体の1年間の営みすべてを『教職大学院のスタッフの力量形成』のための『実践』と捉え、そのプロセスを『省察』し報告したのである。

報告後に、現在教職大学院構想に取り組んでおられる他大学の先生から、「松田さんは、この1年、教職大学院にかかわる『作業』をしたのではなく、きちんとした『仕事』をされたのですね。自分たちの『実務家』に対する思い込みを改めなくてはいけないと思いました。」というとても励みとなる印象深い感想を頂いた。確かにこの1年、毎日が嵐のような日々であり、思いもよらない出来事や課題が日常的に次々と押し寄せてきた。まさに『生みの苦しみ』であった。しかし常に目指すところはぶれることなく、スタッフ間で助け合いワクワクしながら一緒に乗り越えてきた。ご指摘の通り、『作業としてこなし』ことはほとんど無く、自分自身の志に基づいた『仕事』として取り組んできたのである。

また、このグループには、約20年にわたり福井大学で教育改革に取り組んでこられた元々のメンバーの一人である松木先生も同席していた。あとで松木先生は、私の報告について、「嬉しくて涙が出そうだったよ。」と言って下さった。実は、新メンバーの私が、ほとんど無我夢中で突っ走ってきたその過程を通して、結果的に教職大学院スタッフとしての力量形成の第1番目にあげたポイントは『スタッフの同僚性の構築』であった。おそらく、逆に、長年かけて基礎を積み上げてきた先生方にとっては、沢山の新メンバーが一挙に入り、大所帯となったスタッフが『同僚性』を構築できるか、『コミュニティ』を創設できるか…これこそが年度当初からの大きな課題であったのだろう。その課題に対し、新メンバーの出した答えが一致したこの1年の歩みは、私たち福井大学教職大学院スタッフの宝なのである。

Session V・VII 展開を語る・プロセスを開き取る

2日目は、小グループに分かれ、1日かけて、2つの実践の展開をじっくり聞き合った。私のグループには、やはりこの4月から教職大学院を開設する他大学の実務家の先生、他大学の現職院生である先生、4月から福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻（教職大学

院) スクールリーダー養成コースの院生となる附属の先生、同じく教職専門性開発コースの院生となる臨任の先生、学部の1年生、といった多彩なメンバーが集まった。私は、ラウンドテーブルの経験を重ねるにつれ、本質というものは、異質だからこそ見出されやすく、迫りやすいのではないかと思うようになった。このグループの話し合いでもまた、実践の根底にある本質的な部分に自然と焦点が定まり、それぞれの立場から意見を言い合い、深め合うことができた。後日、ご報告頂いた初参加の現職の先生から、「『こんな研究会今までなかった…。』そして、福井大学の先生方の、教師教育、教員養成にける本当に『熱い』想いを感じました。やはり、真摯に、誠実に“教師”をしてきた人間にとっては『今、何かせねば…。』という想いがあるのだと共感しました。」という嬉しいメールを頂いた。

また、他のグループにいた福井大学現職院生のA先生からは、「(同じテーブルの報告者であった) B先生の報告にもすごく刺激を受けました。私は今、ラウンドテーブルの渦の中に呑み込まれてぐるぐる回っています。私もB先生のような授業がしたい！私もラウンドテーブルで報告できるような実践がしたい！」という感想を伺うことができた。その後、人づてにはあるが、B先生もまた「大変充実したラウンドテーブルだった。」とご満足されていたことを聞き、「語り手」と「聴き手」の相互作用によるコミュニケー

Fukui Round Table
Spring Sessions 2008
For Reflective Practice,
Organizational Learning,
and Reflective Institutions

実践し 省察する コミュニティ

Communities of Practice and Reflection

知識基盤社会に生きる力を培う教育と教職大学院の課題
日本の教師教育改革のための福井会議2008
3/1 (sat) 13:30-19:30
福井大学総合研究棟 13階 会議室

学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2008
3/2 (sun) 9:00-14:40
福井大学教育地域科学部 第1号館

探究する学びを実現する教師
教師を支える教職大学院
教師の実践力を培う学校拠点の実践研究

学校と大学/
実践と研究を結ぶ
新しい実践研究組織とそのネットワーク

2008.3.1-2
福井大学大学院教育学研究科
教職開発専攻/教職大学院
(2008.04 開設予定)

※1次参加費 2008.3.1 (F)のプログラムは変更可能性があります

ションの深まりという、SessionIVで柳澤昌一先生がお話されたことの意味を改めて実感することができた。ラウンドテーブルにはいつも、まさに「袖振り合うも多少の縁」という出会いがあり、立場も年齢も専門も異なる、ほとんど初対面の者同士が語り合う中で、濃密な議論や共感がわき起こる。このような時間を持つことが、一人の教員にとっても、明日の授業にとっても、これからの学校にとっても、一番の肥やしになるのではないだろうか。

おわりに 思えば、初参加即初司会で、『ただその場にいるのがやっと』だった1年前のラウンドテーブル。『一参加者』という感じだった2007年6月のラウンドテーブル。そして、実行委員に加わり、計画段階から携わって初めて『創り出した』という自覚がもてたこの3回目のラウンドテーブル。私自身にとって、大きな節目となるラウンドテーブルであった。

私は、教育とは、その社会の、そして一人ひとりの『未来』を創る営みだと思っている。だから、色々な方にこのラウンドテーブルに参加してもらおうということは、福井大学が発する「いっしょに教育をよくしていこうよ！このとっても困難な時代に、自分たちの未来を切り拓いて、確かなものにしていこうよ！」という誘いに乗ってもらおうことであり、このうねりの中に入ってもらおうこと、同志になってもらうことなのだと思う。そして、現職の先生が教職大学院に入学されること、拠点校に名乗りをあげてもらおうことなどもすべて同じ意味なのではないかと思う。

ご参加頂いた皆さんのお蔭で、『ラウンドテーブル2008』は、激動の1年の最後を締めくくり、かつ教職大学院の門出にふさわしい大変いい節目の会となりました。本当にありがとうございました。

…さあ、遂にスタートです！

めざすべき方向を確かめる

長谷川 義治 (福井大学)

はじめに 福井大学総合研究棟Ⅰの会議室でラウンドテーブルの受付をしながら、私は、ちょうど1年前、ラウンドテーブル2007に初めて参加し、福井大学が教職大学院の設置に向けて取り組んでいること、全国の教職大学院設置予定大学の教員を集めてラウンドテーブルを開催していることに、感動・感激したことを懐かしく思い出していました。

それから1年。福井大学教職大学院の実務家教員として、大学の研究者と一緒に教職大学院の開設準備を着実に進めながら、県教育委員会等とのつなぎ役も担ってきました。

教師教育 第1日目は「日本の教師教育改革のための福井会議2008」です。セッションⅠは、シンポジウム「教職大学院の創出 その構想と展望」で、前宮城教育大学長の横須賀薫氏、文部科学省の新田正樹氏、本学の松木健一氏の3人から、教員養成の現状・課題や教職大学院が目指すものなどを説明していただきました。特に、私にとっては、教職大学院は、研究者養成の大学院とは異なり、実践的指導力を備えた人材養成を目指す専門職大学院であり、そこでは、教育実践の経験を省察し、経験知として体系化して伝えることができる教師教育を目指していることなど、かなり整理した形で理解する機会になりました。

セッションⅢは、「教師の協働的な力量形成を支える」をテーマにしたワークショップで、私が参加したグループでは、長野県伊那小学校の「総合学習・総合活動の取組」、富山県堀川小学校の「授業公開の日常化の取

組」、福井県至民中学校の「授業研究を中心にした協働研究の取組」の発表がありました。教員の資質向上を目指した実践報告で、しかも、いずれの発表も、授業づくり・授業改革が中心テーマであったことに、改めて、勇気付けられる思いがしました。

実践を語る 第2日目は「学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2008」です。セッションⅤ・Ⅶは、「展開を語る／プロセスを聞き取る」をテーマに、小グループに分かれて実践の展開を聞き合いました。私が参加したグループでは、福井大学附属中学校の「探究型保健学習」、長野県伊那小学校の「総合活動の実践事例」の発表がありました。前者については、子供たちの学びをナラティブに記録しており、授業参観していない場合の事例研究であっても、授業の展開が生き生きとイメージでき、記録化する意義を体感することができました。後者については、伊那小学校では総合学習・総合活動を軸にして各教科の学習を展開し、しかも、学力調査の結果は県平均を上回っているというのを聞き、大変驚きました。

おわりに ラウンドテーブル2008に参加された宇都宮大学の松本敏氏との御縁で、3月中旬、宇都宮大学開催の「大学との連携による学校活性化フォーラム」に参加し、栃木県の公立小中学校で展開している実践を聞く機会を得ました。「生徒指導で苦勞して中学校が、授業改革に取り組んだら、生徒が落ち着いてきた。」という話を伺い、教職大学院が目指すべき方向を改めて強く意識しました。

世代のサイクルを実感

石井 恭子 (福井大学)

Session III ZoneBは、堀川小の校内研究の話で始まった。教師の壁面いっぱい貼られた大きな紙には、1年生の子どもの学びの軌跡が書かれている。校内の研究グループ9名で1つの学級の子どもたちの詳細な記録をとり、一人の子どもの学びを何カ月もかけて検討していくという。「個人戦と団体戦がある」「堀川小は野武士集団」という言葉から、堀川の伝統を受け継いでいく重みが伝わってくる。伊那小の先生からは、歴代の校長が同校のOBであること、研究の母体が学年であり、恒常的に行なわれることなど、長年の研究体制を継続している堀川小と似ている点が多く指摘された。授業記録をもとに真剣勝負で議論する教師同士の学び合いと厳しさについても共通している。

その後の質問や議論の中からは「授業力のある先生が、あなたの授業はだめだ、といっても若い先生は育たない」「教師が育たないと子どもは育たない」「授業記録で詳細を事実で語ることがポイント」「子どもに学ぶ姿勢、事実で語るときは若い人もベテランも同等。いかに知ったかぶりで言わないかに早く気づくか」などのことばがずっしりと心に残った。

Session V, 6年の社会科での授業づくりの話では、教室の中を想像しながら聞いていたら1時間があつと

いう間だった。子どもの姿を語る中に、グループをどう作るか、なぜ画用紙なのか、掲示のボードの意味など、先生の思いが伝わってくる。資料を配るか配らないか、話し合うか活動させるか、教師が悩み子どもを見つめ決定していく。こうした授業のプロセスを聞くとき、自分の実践や経験に引き寄せて聞いているのに気づく。

一方、一言も発せず黙ってすべてを吸収しようと一生懸命聞いている臨任の先生。「何か聞きたいことは?」と尋ねると「先生の発問は、とても重要だと思いますが、どのようなポイントがあるのですか?」と質問した。聞かれたベテランの先生は「ええっ?急に言われてもなあ、意識してなかったなあ」と言いながら、自分の実践記録をめくりだす。みんなで見ながら「最後まで言わないで問いかけてるね」「途中で止めて子どもにしゃべらせるのでは?」など話し合った。自分の記録を見ながら「わいわい言うクラスがいい。突っ込み合うのがいい」など、自分の暗黙知を表現し、意味づけ、若い臨任の先生に伝えようとするベテランの先生。ここに、「世代サイクルの継承」の姿を見た気がした。

3/1 (sat) 13:30-

知識基盤社会に生きる力を培う教育と 教職大学院の課題

日本の教職教育改革のための福井会議 2008
福井大学総合研究棟 13階 会議室
福井大学教育地域科学部 第1号館

Session I 13:40-15:00
シンポジウム/教職大学院の創出 その構想と展開

福井大学総合研究棟 13階 会議室
横須賀 薫 (前宮城教育大学学長)
新田 正樹 (文部科学省生涯学習政策局)
松本 健一 (福井大学)

教職大学院の創出にあたって、新しい教職教育の構想が立てられ、進められている役割・使命に關して、制度の創出と設計にそれぞれの立場から深く関わった3氏が報告・発言いたします。

Session II 15:10-15:40
特別報告/韓国における科学教育改革と教師教育の課題

福井大学総合研究棟 13階 会議室
Junhee Yoo (ソウル大学)

科学的リテラシーの育成をめざす科学教育改革の課題、そしてそのために求められる教師教育のあり方について、韓国における取り組みを紹介いたします。

Session III 15:50-18:00
二つのワークショップ:教師の協働的な力量形成を支える

福井大学教育地域科学部 第1号館第1112/13/14講義室
Zone A:教職大学院のスタッフの力量形成 教職専門性育成を支える協働研究 教職大学院創出にあたって事業を行ってきた期間で学んだことや、これから力量形成の必要性を感じている課題について、本グループに属して各グループ本ずつ程度各自の経験や問題意識を共有し、議論いたします。

Zone B:中学校における協働研究 その展開と課題を問い直す 中学校において授業づくり・学校づくりのための協働研究をどのように進めていけばいいのか、一人ひとりの教師が豊富な実践・協働研究の経験をもとに考えたい課題がある。長期にわたる協働研究が協働研究の場をめぐりながら学びたいと思います。

Session IV 18:20-19:30
実践し観察するコミュニティを培う:その試行経験を語り合う

福井大学アザラーホール
新しい大学づくりの途中でも進んでいる実践的課題、考えなくてはならない課題、当事者としての経験と課題を率直に交流したいと思えます。

実践し
観察する
コミュニティ

3/2 (sun)

8:50-14:40

学校改革実践研究 福井ラウンドテーブル 2008

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る
福井大学教育地域科学部 第1号館
第11/12/13/14講義室

組織や制度で自分たちの実践をじっくり結び、その背景をふまえて実践を振り返っていく。経験・勘や大人同士が深層を通して学び合う協働体 (コミュニティ) に変えていく。その中で一人一人が、着眼的で主体的な実践者としての力を磨いていく。そうした実践的な営みが少しずつ蓄積されていきます。試行錯誤を重ねながら大切に思われているような取り組みを、より広く広げたい、じっくりの展開を聞き取り、学び合う場を創りたいと思えます。

はじめに:会の進め方について
8:50-9:00 第11/12/13/14講義室

session V 展開を語る/プロセスを聞き取る part1
9:00-11:20 第11/12/13/14講義室

(小グループで実践の背景を聞き合います)
実践記録を止めて実践の多岐にわたっていきなさいと思います。心に残っている場面、言葉、表情、行為、その時々を感じていたこと、ふりかえりの中で見えてきたつながり、話し合いと記録づくりの中で見えてきたこと、いま改めて振り返りながら考えたいこと、等々を無言で書き残す。記録の展開を言葉と実践のつながりを感じたいと思います。実践の進展とじっくり語り、話を共有し、実践を共有して協働的な実践者としての関係がよくなることを目指しますが、その後の実践への問いの深まりを支える役割になると思えます。
9:00-9:30 自己紹介 / 9:30-11:20 報告 /
学習されている主な書籍
伊那小学校/福井小学校/ナリス小学校/福井市立五郎中学校/福井県立福井高等学校
福井大学教育地域科学部実践研究センター/同小学校/同幼稚園 ほか

session VI 実践を語ること・書き表すことの意味/着眼的実践のために
12:00-12:15 1号館2階 大2講義室

session VII 展開を語る/プロセスを聞き取る part2
12:20-14:40 第11/12/13/14講義室

12:30-14:10 報告2 事前に引き継いだ小グループで実践の展開を聞き合います。
14:10-14:30 結び 二つの報告を聴いてそれぞれが考えたことを話し合ってください。
(小グループごとに話し合ってください。14:40を過ぎないようにはしゃがいたくないです)

2008.2.28 ver. 02

(参加者は20名ほどでした)

実践の省察・再構成を通して
活動の組織を専門性形成のための
学び合う共同体に変えるために

省察的な実践を生み出す 学び合う組織を編む

For Reflective Practitioner,
Professional Development,
and Organizational Learning.

実践研究・福井ラウンドテーブル

2001.11.10-11

福井大学地域科学部

地域や職場の実践の場で、自分たちの実践をじっくり問い返し、その省察をふまえて実践を編み直していく。そのことを通して、地域や職場を、大人同士が語り合い学び合う共同体に変えていく。

その中で一人一人が、省察的な実践者としての力量を培っていく。

そうした地道な取り組みが、少しずつ蓄積されてきています。そうした取り組みを互いに紹介しあい、じっくりその展開を聞き、学び合う場をどのように編んできているのかに光りを当てたいと思います。

福井では、福井大学公開講座として、「フォーラム・暮らしと学びを問い返す」という取り組みを続けてきました。また社会教育実践研究フォーラムでは、実践記録を読み合うことを通して、実践研究を深め、実践的な力を培っていく条件を探ってきました。このカンファレンスはこうした取り組みに基づいています。

このラウンドテーブルは福井大学公開講座の一環として開催されます。

実践研究福井ラウンドテーブル実行委員会/ 福井大学公開講座現職のための実践講座 approach 1

福井新聞社提供「教職大学院 課題探る」2008. 3. 2

教職大学院 課題探る

福井大 シンポに1期生ら130人



教職大学院の課題などを探ったシンポジウム＝1日、福井市の福井大文京キャンパス

教育現場で中核を担う中堅教員や実践的な指導力を備えた新人教員を養成するため、福井などが四月に開設する「教職大学院」など教育改革を考えるシンポジウムが一日、福井市の同大文京キャンパスで始まった。県内外の教員や同大教職大学院（教職開発専攻）の第一期生ら約百三十人が、今後の課題などを探った。

二日間の日程で、初日は「知識基盤社会に生きる力を培う教育と教職大学院の課題」がテーマ。中教審の専門職大学院ワーキンググループで主査を務めた前宮城教育大学長、横須賀薫氏、教職大学院の制度設計に携わった文部科学省生涯学習政策局の新田正樹氏、福井大教育地域科学部教授の新田氏は、既存の修士課程と教職大学院との違いや実践の指導力とは何かを明確にしていなければならない指摘。横須賀氏は「大学ではなく、学校現場の中で生き残っていける大学院にしなければならない」と話した。

この後、参加者の大学教員は「スタッフの力量形成」、小中高校の現職教員は「学校における協働研究」をテーマに、小グループに分かれ事例発表や意見交換を実施。二日も引き続きグループ討議を行う。



日本教育研究学会



実践研究福井ラウンドテーブル 2015 spring sessions

Zone A 学校

子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ

子どものこと、授業のことを語り合える組織づくり

学校を越えて語り合い、学び合うコミュニティへ ～ Zone A の Session の概要～

福井大学教職大学院 准教授 岸野 麻衣

Zone Aでは「学校」における「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」をテーマに考えてきました。なかでも今回は特に「子どものこと、教師のことを語り合える組織づくり」に焦点を当てました。

Session I のポスターセッションでは、福井県内外の学校から、それぞれの学校でどのように学校づくりに取り組んでいるか、報告いただきました。福井県の中学校・高等学校からは生徒のみなさんにも報告いただき、子どもも教師も共に学び合う姿が印象的でした。

Session II のシンポジウムでは、長野県中野市立中野小学校の武居和紀研究主任、福井県福井市至民中学校の鈴木三千弥研究主任、金沢大学附属高等学校の風間重利副校長から話題提供をいただき、東京大学の秋田喜代美教授からコメントいただきました。武居先生からは、研究のための研究でなく日常の授業改善に向けて、「心を寄せたい子」を中心に研究を深め、互いに授業を見合い、子どもの姿を語り合って、教師が学習観や授業観を転換させていく過程を、具体的な事例をもとにお話しいただきました。鈴木先生からは、日常的に授業について語り合う場を大事にしつつ、見合った授業について参観記録を交換する取組や、生徒のくらしにかかわる多角的な切り口で校内研修を充実させる実践が報告され、教師同士が支え合う文化を作っていることとお話しいただきました。風間先生からは、学校のこれまで抱えてきた課題を赤裸々にお話しいただきながら、教科の徒弟的な枠組みに囚われず、世代を超えて教師たちがチームになって、学校改善とい

ういわば教師の「総合的な学習」に取り組んでいった過程が語られ、学校がみんなのものになるようにつながりながら、動きを活性化させていることとお話しいただきました。これらを踏まえて、秋田先生からはそれぞれの学校の実践を整理しながら、生徒の出来事と育ち、出来事の展開とつながり、環境の構成と再構成について、短期的・長期的な観点でいかに目に見えるようにしていくか、語り合ったり書いたりして目に見えることで教師の仕事の手ごたえや楽しさにつながっていくのではないかと、授業研究会の持ち方やビデオや写真の活用についても多くの学校で検討の余地があるのではないかとお話しいただきました。

シンポジウムではそれぞれ魅力溢れる語り引き込まれ、コーディネータとしてはまとめきれずこの場を借りてお詫びしたいところですが、「組織づくり」というときに、単に研究会のやり方等の形式的な答えを求めるとは、それぞれの学校の置かれた状況の中で、どうすると「支え合う」ことができるのか、協働で探究していくことが大事だと改めて考えさせられました。きっと参加者の方々も、どうしてそんなことができるのだろうか、自分の学校はどうかかと考えを巡らせたことと思います。

Session III では、参加者の考えたこと、自分の学校での取組や課題について、5人程度のグループに分かれて語り合いました。部屋を移動して、最初こそ戸惑う様子も見られましたが、語り始めるとどのグループも熱気を帯び、学校を越えて語り合い、学び合うコミュニティが展開していったようで、企画者の一人として大変うれしく思いました。

次につながる実践への学び ～Zone A の SessionⅢ での語り合いから～

福井大学教職大学院 非常勤講師 松井 富美恵

予定より20分遅れで始まったSessionⅢは、今回は参加者の増加により5つの講義室に分かれて行いました。今回は、昨年までと異なりこのSessionでの提案報告はなく、それまでに行われた2つのセッション、ポスター発表やシンポジウムの内容を受けて小グループで語り合う形でしたが、あっという間に過ぎた1時間20分でした。午前中のSessionⅡを含め、午後からのⅠ、Ⅱと進行するにつれてわき上がってきた熱気のようなものが、そのままSessionⅢに持ち込まれたように思います。そのためか、自己紹介が済むと、どのグループも以前からの知り合いのような和気藹々とした雰囲気、活発な語り合いがされていました。

私が担当したグループは、W県教育センターのU指導主事、S県高校のN先生、T県高校のY先生そして地元福井のO小学校校長T先生で、立場も校種も様々な5名のグループでした。T校長先生は名簿には載ってないのですが、どうしても参加してくださいとのことでした。まずU先生から、前年までの学校で教務主任として取り組もうとした行事等カリキュラムの精選が難しいという話がありました。各参加者が聴き合い自身の学校のことを語り合ううちに共感の声とともに、何らかの改革を進めようとする時のベテラン教員の考えと若手の育成・活躍とのギャップの話題になりました。「若い教員が活躍できるようにと話し合いの時のグループ分けの工夫をした」「若い教員を大事にしたいと思っていて、今日はヒントがほしいと思って参加した。秋田先生の話に興味を持った。もっと資料がほしい」「ベテランの先生は難しいところがあり

皆のやる気をどう引き出すか悩む」「(ベテランは)築いた自分の枠を壊されるのをいやがり、なかなか踏み込めない」「(研究主任として)ICTを活用し、協働学習を取り入れ改革に取り組もうとしたがなかなか関心を持ってもらえない。底辺層の生徒の学力を伸ばそうとしてきた。」等、関連しながら組織づくりの難しさや悩みがたくさん出てきました。さらに進み、「(教員に)危機感がないと改革はなかなかできない。議論だけでは難しい。」「校内で信頼し、相談できる人を持つこと」「仕組みを作ってもまもなくゆるんでしまう。防ぐ仕組みが幾重にも必要であろう。」「地域の人に入ってもらおうようにした。」「授業を見合うことに取り組み、少しずつ進んできたが・・・」等踏み込んだ話になっていきました。グループ内はミドルリーダー級の教員が多いこともあり、マンネリ化を防ぐことが大事、各教員の意識改革が必要、そのために仕掛けをつくろう、等々のヒントや手がかりを得られ、次につながる実践への学びになったのではないかと、参加者それぞれの表情からも感じられました。また、佐藤学先生や秋田喜代美先生の話がそれまでのセッションを受け何回も引用されていたことが、私には印象に残りました。

時間になり終了の合図をしても話し合いが弾んで、なかなか終われないグループがあり、とうとう声を掛けました。同様に、どの部屋でも一歩踏み込んだ学び合いがあったのではないのでしょうか。今回は、一段と参加者の意識と意欲の高さが感じられたSessionでした。

Zone B 教師教育

21世紀の教師教育をイノベーションする

学校を基盤とした教員養成と教員研修のあり方

教師はどこで、どのようにして育つのか ～学校を基盤とした教員研修の充実を～

福井県東京事務所 兼 福井県教育庁高校教育課 指導主事 渡邊 久暢

我々教師はどこで、どのようにして育つのか。佐藤学氏はSessionⅡにおいて「教師の学ぶ場は教室を中心に同心円的構造でなければいけない。」と述べ、教室・学校を基盤とした教員研修の重要性を指摘した。同じ教室で授業を展開する同学年の同僚や、隣の教室

で授業を展開する同一教科の同僚から受ける様々なアドバイスが、一番有効だという。もちろん、学校内部のメンバーで研修を行うだけでなく、研究者の方々や、各県の教育研究所所員の方々はその学校に出向き、様々な角度から「その学校の事例にマッチした指

導や助言」を行うことも教員一人一人の学びにつながる。福井県・長野県の両教育長も「訪問研修」の重要性を指摘されたが、今後ますます教室・学校を基盤とした教員研修の充実が求められていると言えよう。

鈴木寛氏が御指摘のとおり、どの学校にも当てはまる「正解」は教育活動にも教員研修にも存在せず、ただあるのは「個別暫定解」のみである。教員研修の在り方については特に、その学校の児童・生徒の状況をふまえた上で行うことが求められる。セッションⅢでは、その具体的な営みについて福井県教育研究所・静岡県教育センター、長崎県教育センターの方々から学ばせていただいた。

私自身は平成25年度の1年間、東京事務所を拠点として首都圏の中学・高校をのべ80回以上訪問してきた。拝見したクラスにおいて大変すばらしい授業を展開される方は数多くいらっしゃった。しかし、ふと隣のクラスを見ると・・・という状況も多くあり、授業改善の取り組み等の教員研修を組織的に行うことの重要性を痛感させられた。しかし、福井県内の学校でも校内研修の充実化はどんどん進んでいるときく。若狭高校では、24年度よりSSH・研究部が主体となり、学

校をあげての授業改善を目指した校内研修プログラムを立ち上げ実施しており、25年度は全ての教科による公開研究授業日を設定し、授業後の研究協議も教科ごとに様々な大学や福井県教育研究所等から指導助言者を招き実施したという。また「アクティブラーニング」の実践者として有名な産能大小林教授や岩手県立盛岡第三高校の下町教頭などを招いたり、学力評価に詳しい大阪教育大学の八田准教授を招いての「資質・能力の指導と評価」についての研修を行ったりするなど、学校を基盤とした教員研修を充実させた。自校の生徒に対してどのような授業を展開すると良いのか、という「個別暫定解」を模索するような教員研修を積み重ねているといえる。教員対象のアンケート結果からは、教員一人一人が授業改善意識を高めていることが読み取れるという。

新しい学習指導要領の検討が開始され、高大接続改革も急ピッチで進む中、教員の資質・能力の更なる向上は急務だと言えよう。今回のZone Bへの参加を通して、学校を基盤とする教員研修の在り方について大きな示唆を頂いた。教育研究所や教職大学院との連携による校内研修の充実策について、更に考えていきたい。

21世紀の教師教育をイノベーションする

- 学校を基盤とした教員養成と教員研修の在り方 -

鹿児島大学教育学部 准教授 廣瀬 真琴

「日本の教師教育は25年遅れている」とは、登壇者佐藤学氏の発言である。Zone Bではその遅れ、すなわち教職の高度化を巡り、行政（福井県教育長林氏と長野県教育長伊藤氏）と文部科学省（文部科学省参与鈴木氏）、教育学者（学習院大学佐藤氏）とが、対談を繰り広げた。私見では、今対談の成果は、各教師の専門職としての成長を持続的に支援・推進するシステム構築の必要性について、上記の主体間で共通理解が進んだ点にある。

行政からは、知識伝達型からの脱却を色濃くし、研修を多様化（派遣研修や学校へ出向く研修等）している動向が報告された。佐藤氏は、その動向の展望を示

した。それは、研修を提供するという考えから、教室・学校から同心円的に広がる教師の学びの空間を舞台に、自らの成長を持続的に推進する教師をどのように育成・支援するかという発想へのシフトである。また、鈴木氏が示した教師像もこの見解に符合した。氏の発言主旨は、知識基盤社会に生きる子どもや保護者等の観点から考えるに、耐教師性カリキュラムの開発ではなく、耐カリキュラム性教師（curriculum proof teacher）の養成が希求される時代へ突入しているという点にあった。これは提供される研修だけで実現されない教師像であり、教師教育に携わる者が先の発想に立ち共同する必要性について、衆目の一致をみたZoneであった。

Zone B に参加して

鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター 准教授 内 健史

今回のラウンドテーブルにおけるフォーラムで、話題提供機関として本学部のモデルカリキュラムの研究実践を発表する機会を得た。このフォーラムは、参加メンバーが実践者や研究者として互いの実践とそこでの思考をじっくりと聴き取り、学び合う場であることと、「21世紀の教師教育をイノベーションする：学校

を基盤とした教員養成と教員研修のあり方」というテーマが県教育委員会から人事交流で大学に実務家教員として派遣されている自分にとって重要なものであるということから、大変貴重な場となった。

自分たちのグループは、福井大学教職大学院の先生のコーディネートのもと、福井県内からは教育事務所

長、特別支援学校校長、私立大学教員、県外からは静岡県立学校教諭の方々と多様なメンバーが各々の実践やそこでの思い、考えを持ち寄り議論した。話題提供では、福井教育事務所嶺南教育事務所について、福井県唯一の教育事務所として県の出先機関としての役割と指導主事を配置していない2市4町の指導事務も担っていること、教育事務所に内地留学している研究員と事務所の研究主事の一部のメンバーも教職大学院の院生として学んでいること、教職大学院教員がチームを組んで院生の学校現場における実践研究を支援する高度な専門的支援との相乗効果で学校支援の充実が目指されていること等を興味深く伺った。さらに、本学部の教員研修モデルカリキュラムに関する話題提供ではピア・サポート型研修やWebを活用した交流等について説明し、県総合教育センターや市町村教委との連携のあり方、離島へき地を多く抱える鹿児島県における

テレビ会議の必要性、ピア・サポート型研修の具体的な進め方等についての質問や、時間をかけずに継続して振り返りを蓄積するようなファイルの工夫やICT端末を活用した研修ネットワークづくり、研修に主体的に取り組まない教員への働きかけの重要性等について貴重な意見をいただくことができた。

この他にも私立大学における教員養成、特別支援教育コーディネーターの研修、高等学校におけるICTの利活用など多種多様な話題について、実践者としての立場から自由な雰囲気情報交換がなされた。それぞれの地域や学校の実態、教員のニーズに応じて多様な研修や教員養成の形や工夫、課題があることを実感できたことで、自分たちの取組みを客観的に見つめ直し、これからの教員養成・研修のあり方を考え直す意義深い時間であった。

Zone C コミュニティ

学び合うコミュニティを培う

Zone C に参加して

岡山市立光南台公民館・主任社会教育主事 片山 るみ

ポスターセッションは、5分ではとても足りない、もっと聞きたい、という思いになりました。紹介を聞いていると、職員体制等が岡山とどう違うのか気になり始め、つい実践とは離れて聞いてしまったり、でもハテナが次々と思いつかぶのでやはり黙っておれず尋ねたりしていました。すごい！真似したい！いい事業だな！と思うと、どうやったら自分の館でもできるだろう、こういう点がネックかな、じゃあどうクリアしたのか、いやそもそもこんな問題点は福井にはないのか、等々、思い浮かびます。既に似たような事業を実施していても、うちではこういう風に発展させたな、とか。そう思っていると他の人が似たようなことを質問するので、あーそうそう、と思ったりしていました。5分という時間制限があるので、余計にいろんなことを一生懸命考えたように思います。時間が足りない、もっと聞きたかった、という感覚がありました。

シンポジウムの遠藤さんのお話は、本当に初めてすとんと福島体験が入ってきました。なぜだろう。本当に身近な人たちの本音の話として入ってきたのです。編集方針や人選やインタビューの取り決めを、丁寧に丁寧にしているのがよくわかったからかもしれません。語りによるエンパワメントを自分自身が実感しているからかもしれません。子育てで悩み迷っている保護者の方が、同じ悩みを持つ親の会で、涙をためて話したり、一緒にもらい泣きしながら励まし合ったり、そんな中で保護者自身がだんだん強くなっていった様子を実際に一緒にいて体験したからだと思います。

続いての久島さんのお話は、耳が痛かったです。「公民館に来ている人だけの声を聞いていると狭い、来ていない人の声を聞けていない」。公民館の利用者は女性が大半で、世間一般に比べると女性の声は届きやすく、そこでつい、世間には届きにくい声を聞いているという気持ちになっていたようです。けれど、公民館に来ている女性と来ていない女性、例えば高齢者と若い世代と分けて考えると、来ていない若い世代の女性の声は届いていない。来ていない人の声を聞こうとする姿勢もですが、その前に、聞けていない声があるという前提にたつ当たり前の姿勢、そこを指摘されたようで、耳が痛かったです。

クロスセッションでは、ただただ、福井市の公民館の様子に、へえ、ほお、という状態でした。ついそのまま岡山市の公民館の様子を話してしまい、あれで実践報告になっていたのかどうか、同じグループの方には申し訳なかったです。報告をするという立場になってみて、何をどう説明したらいいのか、相手は何を知りたいのか、自分が当たり前のように使っている言葉も相手には伝わらないかもしれない、など、普段と違った目で事業を振り返る機会になりました。が、それでもうまく話せなかったし、そもそも、自分は何を話せたんだろう、とも思います。どういう思いで事業に取り組んでいるかをうまく説明できない自分に、向き合わされた気がします。

楽しくて勉強になり、そして少し苦しかった、というのがZoneCに参加しての感想です。

Zone C に参加して

長野県上田市教育委員会生涯学習課

伴 美佐子

『山高みあけはなれゆく横雲の

絶へ間に見ゆる嶺の白雪』（源 実朝）

信州の北信五岳、そして、立山、白山…。いくつもの雪に抱かれた嶺を見上げながら高速道路をひた走り、2度目の福井訪問の機会をいただきました。山というのは不思議なもので、見上げる場所によってまったく別の「顔」を見せてくれます。私感ですが、ラウンドテーブルは、山を見上げる行為に似ている気がします。

思い起こせば昨年5月。信州より福井大学教職大学院に赴任した宮下先生から1本の電話が入りました。「（ラウンドテーブルは）素晴らしい学びの場だよ！ぜひ来てみない？」そんなお誘いに胸躍らせて、6月のCross sessionに参加いたしました。ドキドキの時間でした。100分という壮大な時間の中で自分の実践を整理整頓しながら発表。そして、その発表を本気になって聴いてくださる方々。

教育という共通項を持つ、日本全国の様々な立場の方の実践とその省察の真剣勝負が、

「ああ、そんな風に見えていたのか」

「そんなアプローチの方法があったのか」

と、私たちの目指すべき嶺を立体的に浮かび上がらせ

てくれるのです。

また今回は、Zone Cにて福井市立至民中学校でご活躍いただいている「サポート至民」の山田さんとともに報告の機会を得ました。日頃、教育委員会の職員として、学校・家庭・地域の協働に関わる者にとって、ボランティアで学校を支えつづけてくださる山田さんの口から「私たちの至民中学校」という言葉がぼろりとこぼれおちるのをお聞きしたとき、言いようのない温かな感動に包まれたのを、今もはっきりと思い出します。もはや、山田さんにとって至民中学校は、誰のものでもない「私たちのもの」。

私たちのたいせつな子どもたち。

私たちのたいせつなふるさと…。

少子高齢化が進み、50年後には15歳以下の子どもの数が半分以上になるという現在。資源に乏しい我が国の宝が「人」であることは言うまでもありません。福井では、教育という大切な役割を担う方々が「テーブルを囲んで」ゆるやかにつながり、互いに尊敬し、人の絆を結びながら、山々のような高い理念を仰ぎ讃えていらっしゃることに深い感銘を受けました。

混沌の横雲が開け放たれ、その絶え間から目覚ましい眺望を試してみたいものです。

子どもたちをまん中にして、仲間として…。

ラウンドテーブルに参加して

福井市至民中学校「サポート至民」

山田 博英

はじめに、平成27年2月28日私たちは「ラウンドテーブル2015のZone C」に参加した。昨年に続き2回目の参加です。昨年は手持ちの資料も無くラウンドテーブルの名前は聞いていたが、緊張と共に大海に放り出された感じでした。今年は私たちのこれまで行ってきたことを抜粋して十分ではなかったがそれなりの資料を配ることが出来ました。それでも場慣れしていないのでテーブルの皆様にごだけ私たちの事が伝えられたか反省しています。

地域の学校の応援団になる。私達の初期の活動は「ボランティアガイド」から始まりましたが、学校と親・地域が協調して生徒の育成に当たることが国の方針として強調される様になった今日、平成23年2月、グループ自ら発展的に学校を支援する「サポート至民」と名前を変えてコミュニティースクールの一員となることを目指しました。これは発足当時の校長山下忠五郎先生の意志が強く私たちの心に共鳴したからです。

何事も教科書で学んだり、知識として知っているだけでは不十分ではないでしょうか。特に当校では、地元の農家の皆さんの好意により米づくり、さつま芋つ

くり、そば手打ち体験、収穫感謝の会など先生、生徒、親、地域の方がたと会話をしながら実体験する事に恵まれ、より深く学ぶことが出来る貴重な時間であったと思います。生徒達の参加希望者も大変多く意義ある時間にするために私たちは大人としてどう生徒たちにどの様に接したら良いか日頃から考え続けています。

人生経験を多少なりとも生かして先生の指示の下、授業に部分的に参加したり、課外の時間に生徒に接し普段の姿を見ると1年生のころは如何にもあどけなさが見られたが3年生になると、言葉に態度に大きな変容が見られて頼もしく感じられるのが嬉しいです。

初めの頃、校内を見て回る機会があった時生徒たちの良くない行動を見るにつけ私の心に「おい、こら」の態度が表に現れる傾向が無きにしても非ずであったが自分の言動を慎み早まる気持ちを抑えて誠実さを以って接することが肝要であると学びました。私たちの目的の一つに生徒の社会性を育む事が有ります。先に記した農作業やすべての行いに情操的な面も付け加える事も忘れてはならないと思います。

そしてこれからも多少の軌道修正をしながら「サポート至民」として息長く歩んで行きたいと思っています。

おわりに、昨年に続き参加が許された会場には飲み物も用意されていて、その気配りにホットした。第7テーブルに着くとまとめ役の熊野直彦先生の穏やかな

語りで始まり緊張も和らぎ話すことが出来感謝しています。私と同じテーブルで発表された長野県上市市教育委員会、伴美佐子様の資料は実に良く構成されていました。また何時の日かテーブルを囲む機会があれば参考にしたいです。今回よりまた私たちの取り組みが充実した成果が得られように学校の先生・生徒達と共に過ごす時間を大切にしていきたいと願っています。

「聴く」という実践

そうそうカフェ 大竹 幸浩

ZoneCでは「<女性たちの声を聴く>実践の可能性」と題したシンポジウムがあった。

私は小グループでの対話を通じて「死生を学びあう場」を培う実践に取り組んでいる。その中で「聴くという行為は難しい」と感じてきたことから、このシンポジウムで「聴く」ことについてどのような可能性が示されるのか興味を引かれて参加した。

久島幸江さん（越前市味真野公民館）は、「住民の声を、『上手に』ではなく『一所懸命に』聞き取ろうという態度で臨んだ」と語っていた。

私の場合、人の語りを「聴く」とき、それが自分の価値観と相容れなかったり、攻撃的な口調であったりして、自分には合わないと感じてしまうと、耳をふさいでしまいたくることがある。

しかし、そのような語りであっても、久島さんと共通するかもしれないのだが、語り手に向けて「一所懸命に」じっと耳をそばだてているうちに、あたかも地中で鉱脈を見つけたかのように、あるいは、難解そうな現代アートの意味を私なりに感じ取ることができたときのように、その語り独自の文脈が脳裏に浮かび上がってくることもある。そうなると、むしろ、その語りを「聴く」ことがおもしろくなり、その語りの意味をもっと探してみたいと思ったりする。

いつもそうだということではないのだが、というよりも、稀にそういうことがあるというべきなのだが、おそらく、私はそのように「聴く」過程で、自分の思考の枠組みや語り手に対する思い込みをいったん外しているのだろう。そうして、語りに対して予断を持つ誘惑から自分を解放できたとき、スッとその人の語り

が自分の中に入ってくるような気がする。

一方、そういうとき、語り手はどのような様子かという、「気持ち」が穏やかになっているのではないかと感じることもたびたびである。

遠藤恵さん（NPO法人市民メディア・イコール）らが、福島県内で3.11を経験し、今も福島に住んでいる30人の女性の体験を聞き取ったときに、インタビューから「話してよかった」「気持ちが楽になった」といった感想が示されたとの報告があった。

このケースでは、聴き手が全員女性であり、被災当事者であり、「聴く」ことについて鍛錬してきた方々であったからこそ、こうした感想が寄せられたのだろう。それにしても、ここに、「聴く」という実践が「語り-聴く」場にもたらす作用の一端が示されていると思った。

「聴く」という実践は、語り手と聴き手の双方に、少なくとも上記のような益を生じさせ得るし、その相乗効果によって、穏やかで豊かな場を形成し得る。

これは、自分の価値観と相反する内容の発言や、差別的な発言などに対する、暴力を頂点とする過剰に対抗的な対応とは対極にある、平和的な実践のあり方と言える。もちろんそのような発言を「聴く」ためには、「聴く」ことについてのすさまじい研鑽が求められると思うが。

2人の報告者から、困難な課題を抱えている状況の中での、「聴く」ことを軸とした実践の報告を聴いて、それらの実践には、静かに場の状況を変革してゆく可能性があることを学んだ。

Zone D 授業

授業改革の扉を開く

—教師は授業sで何を残したいのか?—

ラウンドテーブルを振り返って Zone D

福井大学教職大学院 非常勤講師 冨永 良史

ZoneDでは、これまで5回のラウンドテーブルを積み重ねながら、授業にまつわる問いを深めてきた。子どもの目線から授業を体感し、授業者としていかに冒険できるかを問い直し、授業を駆動する問いはどのように生まれるのかへと問いを進め、質の高い学びを生む問いとはどのようなものかを問うに至った。迎えた今回、原点をまっすぐに見つめ、「私たちは授業の積み重ね(授業s)の末に何を残したいと願うのか」を聴きあい、語りあった。

Session I。4枚のポスターに囲まれた空間に実践の語りと傾聴の熱が満ちた。牛久市立下根中学校から「わからなさの共有」による学びの共同体が、勝山市立鹿谷小学校から地域の自然にふれあい実感とともに理解を深めていく「持続発展教育」が、横浜山手中華学校から笑顔と好奇心にあふれる「美術教育」の光景が、お茶の水大学附属小学校から子どもの自主性を生かした「ひろがる・つながる学びをつくる」フレネ教育が、次々と語られた。語り進むにつれ、場には一体感が生まれ、4つの物語が積み重なり、ともに授業を考える対話の萌芽が宿った。

Session II。会場の扉を開くと、壁面をうねる巨大な龍が迎えた。龍は横浜山手中華学校の子どもたちの美術作品。子どもたちの手と心の結晶に囲まれた会場で、「子どもたちの頃の授業で、何を覚えている？」と問いあうことからセッションが幕を開けた。驚いたこと、先生の脱線、解った喜び・・・かつての授業の記憶が和やかにわかちあわれた場に、最初の報告、山梨県見延町立大河内小学校の古屋和久教諭の語り染み渡った。その語りは、子供たちが夢中になって学びあう「教室文化」をいかにつくり育てるかに源を発し、授業外の活動を学びを支えるものへと捉え直すこと、事例としての「学びの足跡」を残すノート指導へと展開していった。

正直私は、ラウンドテーブルが何を意味するのかさへほとんどわからないままの初参加だった。福井のおいしい蟹でも食べに行く程度の軽い気持ちで参加したのだったが、その思いは大きく裏切られ、学びの多い2日間になった。

初日のZone D Session Iで私は下根中学校の授業づくりについてポスターセッションで発表した。まず発表テーマの幅の広さに驚かされた。大学なのだから

静かな語りにも内包された学びへの真摯な思いに背中を押されるように、私たちは互いの胸中に残る余韻を対話し、次に問いを進めるべきことを模索した。象徴的な問いが学生から投げかけられた。「学びあいの大切さは理解できる。でも、どうやったらこういう授業ができるのでしょうか?」。この問いは、次のセッションへの橋渡しのように響いた。

Session III。続く報告で、埼玉県立新座高校の深見宏教諭から、生徒が主体的に学びあうために必要な「解放」が語られた。「ここでなら自分を表現しても受け入れてもらえる」と安心できる解放された関係と空間に、身近なものに翻訳された授業テーマが投げ入れられた時にこそ、生徒はつながりあい学びあいを始めるのではないかと。柔らかく穏やかな語りにも耳を傾けるにつれ、私たちの思考と関係はゆったりとした深まりを帯びた。

ふたりの教諭の報告が4枚のポスターの物語とも結びつき、余韻が様々に交錯し融合し触発した。ここに至り会場には、授業の本質を問いを進めるにふさわしい充実した空気が満ちた。しかし刻限は訪れ、最後にひとつの問いに思いを巡らせるにとどまった。「私たちは、授業の積み重ねの中で、子どもたちに何を残したいと、本気で願っているのだろうか?」。沈思の後、多様な思いが多様な言葉で紡がれた。いずれもが教科を超えて、学ぶことの本質とは何かを見通していた。

今回のZoneDは、私たちに何を残しただろう。掲げた問いの大きさに比して過ぎた対話の時間はあまりに短く、達成感より、さらに問いを進めなければならないという教師としての責任や意欲が残されたように感じた。途中、学生から投げかけられた「どうしたらこういう授業ができるのでしょうか?」という問いは、問いとして響き続けるからこそ、そのような授業が可能になるのかもしれない。

茨城県牛久市立下根中学校長 岩田 博

それは授業づくりについてのかかなり内容を絞った専門的な発表会になるかと思いきや、音楽教育から自然観察の授業と何でもありの太っ腹。その後のSession II IIIでもあらゆる分野の先生方とグループを組んで話し合い。それなのに全く疎外感を感じることなく、共に学び合うことができる懐の深さと温かさがそこにあった。夜ホテル前の居酒屋で仲間と飲みながらラウンドテーブルでの学びを振り返ることができた。越前

ガニは高くて手が出せなかったが、ズボガニはとても美味しくいただけました。

そして、2日目も全く異なる分野の方たちと、まさに丸テーブルを囲んでたっぷり半日間の語り合い。最後はその日初めて出会ったグループのメンバーが、あ

たかも昔からの同僚のように笑いながら学びを交わすことができた。まるでごっちゃ煮のような学び合いの場。それが福井ラウンドテーブルの本質なのかもと気づいたときにはあっという間に時間が過ぎて終わっていた。福井大学恐るべし。

身延町立大河内小学校 教諭 古屋 和久

「大きくて小さい研究会」。実践研究福井ラウンドテーブルの魅力を一言で語るとしたら、この言葉がぴったりだと思います。ハーグリーブス先生の「知識社会の教師の資本」という大きな教育の世界に出会うこともできれば、1時間の授業という小さな教育の世界にもじっくり出会うことができました。参加者が非常に多い大きな研究会ですが、6人という小さなグループでじっくり語り合うことができるのもラウンドテーブルの魅力です。

6月に続いて2度目の参加になるわたしは、教師が日常的に行っている小さな教育実践を例に、「教室文化」という大きな話をさせていただきました。2日目のクロスセッションで報告された実践は、個人や学校

(大学)、県という小さな単位で取り組まれたものですが、「教育」という大きな世界や「日本社会」の抱える大きな問題、「豊かさとは何か」「いかに社会に貢献すべきか」というような大きな問いに向き合うことができました。

わたしの発表した「学び合う教室文化」を育てる実践について、鹿児島大学や福島大学の学生さんたちとお話しする時間がとれました。彼ら・彼女らの教育に対する真摯な思いに一つでも小さな灯りをとることができたなら嬉しく思います。やがてそれが、研究や教育実践上の大きな「力」になってくれることを願わずにいられません。

福井県小浜市教育委員会 指導主事 加福 秀樹

授業改革の扉を開く～教師は授業sで何を残したいのか～に参加し2つのことを感じました。

1つは「学び合いの土壌づくり」の重要性です。学び合いは分からないことを分かろうとする「なんで?」「どういう意味?」などの問いから生まれる。問いは自分の考えを持つことから生まれ、学び合う教室文化の上に成り立つ。この両面をバランスよく形成していくことの大切さを再認識できました。

2つ目は「学び合うことの心地よさ」です。グループ内での意見交流は多くの刺激があり、聴きあうことが心地よく感しました。そのせいか時間とともにメンバーの関係性は強まっていきました。まさに子どもに

味わわせたい気分を味わっていました。

また、学び合う中で自然と自分の実践をふり振り返り、「自分はなぜ教師になったのか」「教師になって何がしたかったのか」を自問自答していました。私自身の教育観を再確認し、今後「何を残したいか」が見えてきたような気がしました。

気がつけばZoneDは「学び合う心地よさ」と「原点回帰している自分」を私に残してくれていました。何を残すかも重要ですが、いつのまにか心に残せるこの腕前こそ私が一番学ばなければならないことなのかもしれませぬ…。

埼玉県立新座高等学校 教諭 深見 宏

東京駅から3時間半。新幹線と特急を乗り継いで福井大学へやってきた。総合研究棟の窓から見える山脈は雪でまだ白い。出発地とは質の違う寒さの福井市にあって、ラウンドテーブルの会場は全国から集まった教育者の熱気で充満していた。

そんななかで、「解放して伝える 使って残す」をテーマに、生徒のなかに学びを残すための授業実践と、授業方法から一步戻って伝わる状態を整えるということ、学びの内容を使う場面を想定することで残していくということについて発表させていただいた。

内容は、生徒を解放することで他の生徒や教師へ考えを発信し受け取ることができる状態をつくり、生徒の力で内容を濃くしていく授業を行うことで記憶を

「エピソード」にまで引き上げる。そこへさらに授業で学んだことの使用場面を想定させることで、生徒が実生活で授業から学び取ったことを使用する場面に気づきやすくする。教室の中のつながりの網目を細かくするための会話や、学んだことを使用する場面の想定は、生徒と教師お互いのなかでフックとなり学びの残存濃度を増すことにつながるというものだ。

これに対して会場の方々からは、生徒の状態やフックに対して様々な感想や質問が挙がった。これら聞き深めていくなかで、生徒ばかりではなく教師の側も授業方法の選択や生徒理解に対して閉じている部分があったのではないかと。教師同士も互いに対話し授業や生徒に対するフックを多くもつことで網目が細くなく

りより効果的な授業が提案できるのではないかということが見えてきた。

また、実践報告で隣り合った先生から出た「自分もあの先生の実践を取り入れた指導をしたのだけれど、どうしても自分には合っていない気がする」という言葉や、翌日のラウンドテーブルで出された「教育の地域性に胸を張っても良いのではないか？」という言葉からは、良いと言われている実践を画一的に取り入れるのではなく、教師のパーソナリティに合ったやり方をその地域に住む生徒（あるいは生徒個人）の特性に

合わせて提供することが教育の効果を高めることにつながるのではないかという考えが浮かんだ。山脈を越えて3時間半も離れているのである。関東と北陸でもこれだけの時間がかかるのだから全国の学びの場に存在する教師や生徒の質にも多様性があるはずだ。

生徒と教師をつなぎ、かるやかな発想で地域や生徒の状況学びの要求に合った教育方法を選択する。そのような新たな教師像を今回の報告会から手に入れることができた。聞いてくださった方のなかにも明日の教育に対するヒントを残せたならば嬉しく思う。

Round Tables: Spring Sessions 2015

ラウンドテーブルに参加した院生からの報告

ラウンドテーブルに参加して

教職専門性開発コース平成26年度修了生 坂下 元

去る2月27日。私は小松空港にいた。今回のラウンドテーブルでシンポジストとして来福されたアンディ・ハーグリーブスご夫妻を福井までお連れするというミッションのためである。小松空港から福井までの約1時間、私は緊張しながらもハーグリーブスご夫妻とお話をさせていただきながら福井に向かった。道中ハーグリーブスご夫妻は一院生にしか過ぎない私に様々な話をしていただくと同時に、じっくりと私の2年間の福井大学と拠点校での学びの過程に耳を傾けてくださった。1時間ほどの時間であったが、翌日からのラウンドテーブルに対して期待を膨らませるには十分な時間であった。

翌日はラウンドテーブル1日目。私は引き続きハーグリーブス教授のガイドをしながらゾーンAに参加した。ハーグリーブス教授のスケジュールとの兼ね合いもあり、私は短い時間しかセッションに参加することはできなかった。私はハーグリーブス教授と共に自らが実習を行っている至民中学校の鈴木三千弥先生の発表を拝聴した。おそらくは100名を超える聴衆の前でのご発表であったが鈴木先生は生き生きと至民中学校での取り組みをお話された。「多忙感」が「充実感」へ変わるような1年間の取り組みを時にその場にいた中学生を話に巻き込みながらの発表だった。ハーグリーブス教授は鈴木先生の発表を聞きenthusiastic（情熱的）と言葉にされた。至民中学校の実践者の端くれとしてとても誇らしかった。私事ながら私は来年より、愛知県にて教員として励む。現場に出るという不安感が鈴木先生の発表を聞き、これほどの現場で経験を積ませてもらったことを来年から活かしていこうという「期待感」へと変わっていくことを感じながら会場を中座した。

最終日となる2日目は自身の2年間の学びを報告することとなっていた。私は福井大学の富永先生、長野県信州大学附属中学校のA教諭。武生市内の小学校のB教

諭、大学生のCさんとテーブルを共にすることとなった。まずは私の報告。80分という時間の中で「生徒との関わり」「授業実践」「地域連携」の三つについてじっくりと報告をさせていただいた。これら三つの要素を貫くものをまとめ切れなかった報告であったと反省するが同じテーブルの皆様はそれぞれのお立場からコメントをくださった。A先生は2年間の実習では体験することができなかった保護者との連携の在り方という視点で、特別支援コーディネーターであるB教諭はユニバーサルデザインという視点で授業を構成するという視点を与えてくださった。異なる領域の方からの意見で自分の実践がより広く見えるようになることを私はこの二年間で何度も体験している。次に武生市内の小学校のB教諭から特別支援コーディネーターとしてのお立場で支援を要する児童とその保護者、または、担任の先生への支援の実際が報告された。詳しい報告の内容は割愛するが、2年間の実習の中では体験できなかった緘黙の児童とその保護者への支援の実際を赤裸々に語っていただいた。特別な支援を要する生徒を支えるには、保護者と手を携えていくことや外部機関との連携が不可欠であることを改めて考えることができた。

最後に信州大学附属中学校のB先生の報告となった。信州大学附属中学校では3年間を貫く総合の学習が展開されているという。B教諭のクラスでは地元の温泉街を盛り上げるというプロジェクトの元、学習が展開されているという報告だった。報告もそこそこにB教諭は「今後の学習をどのように展開すればよいのか何か提案ありませんか？」とテーブルのメンバーに意見を求めた。そこからはテーブルの全員が生徒の学びに思いを馳せながらいくつかの提案をしていった。時間が経つのを忘れてしまうほどの時間だった。報告の終わり際「先生、ラウンドテーブル最高ですね。」と一言。私も全く同じ気持ちだった。話し手が自らの経験や思いを開き、語る。聞き手は話し手に寄

り添うように、自分の実践に照らし合わせながら傾聴する。そんなダイナミックなラウンドテーブルに院生として参加するのはこのラウンドテーブルが最後にな

るが現場に出てからも参加したいという思いを更に強くさせるような3日間であった。

教師は「楽しい」専門職である

教職専門性開発コース2年／福井市至民中学校 高田 侑来

2月22日、福井県に春一番が吹いたとの発表があった。昨年より18日早かったそうだ。それから約1週間後の2月28日、福井大学のキャンパスにもそれは吹いた。しかしあの場に吹いた爽やかな風は、季節を感じるだけのものではなかったはずだ。人それぞれ感じ方は違うが、どこか「新鮮」で、かつ「学び」のある、そして何よりワクワクする「楽しさ」がある刺激的なものだったのではないかと。少なくとも私はそう感じた。

2日間に渡って行われたラウンドテーブル。私はたくさんの方の言葉、実践、考え方、そして人と出会った。その中で特に印象に残った1日目のシンポジウムの内容を中心に報告させていただく。

私はZone A「学校」のセッションに参加した。テーマは「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」。その中で今回は「子どものこと、学校の事を語り合える組織づくり」に焦点をあて、午後に行われたシンポジウムでは校種が違う三名の先生の実践に耳を傾けた。長野県中野市立中野小学校の武居先生・金沢大学附属高等学校の風間先生、そして私のインターンシップ先でもある福井市至民中学校、鈴木先生の報告である。先生方が学校運営の中心としてどのような実践研究会を企画し運営しているか、その工夫を中心にお話いただいた。共通していると感じたのは以下2点。まず職員が自分自身の気持ちや経験を語る場を設けること、そして研究内容に仲間（同僚）の希望や悩み、つまり本音を聞き入れ盛り込むことである。

まず、これを読む教員の皆さんは自校の研究会にどのような心意気で参加されているだろうか。想像するにその気持ちは決して明るい、前向きな気持ちとは言えないと思う。その理由は、つまらない、面倒というマイナスなイメージが付きまとうからだと予想される。これを改善する一つの方策が、教員が自分自身のことを飾らず「語る」という行為、そしてそれが出来る場を設けることである。私が思うに教員は、日々の業務に追われ公式な場で悩み等自分の胸の内を吐露する機会はほとんどない気がする。もしあっても雑談がてら仲の良い同僚と話すのがやっとだろう。そこで、研究会内で授業の事、生徒指導の事、その他悩んでいる事を学校が抱える課題にそって自由に語る機会を設けることで、教員同士の絆が徐々に深まっていく。またこの気軽に、自由に、というのがポイントで、フランクに話す事で業務感がなくなり、より充実感を味わう事ができると思われる。実際、武居先生が用いていたスライド内の写真に写る先生方は、どの方も表情がよく生き生きと「楽

しそうに」していた。この場がきっかけとなり、研究会に対するマイナスイメージを払拭し、なおかつ充実感も得られればこんなに良い事はない。また人と語り合うことで教師という職業が本来持つ、「人と関わることができる楽しさ」を取り戻すきっかけになるかもしれない。

二つ目に関しては、私が所属する至民中の鈴木先生のお話をご紹介したいと思う。鈴木先生は様々な経験や教育観を持つ同僚の顔を思い浮かべながら、楽しい時間になりたい、実りある時間になりたいという一心で研究会をしかけていた事実を、あの日初めて知った。特に同僚の本音や要望に応えるという形で研究会を企画運営されていた。例えば、私も参加したある月の研究会での話。至民中の教頭先生が講師となり、学級経営についての実践を語っていただいたことがあった。実はこれは先生方の中に、学級経営についてもっと知りたい！との声が上がったことがきっかけだったそうだ。このように同じ現場で働く仲間の「やりたい！」や「知りたい！」といった本音に耳を傾け、ニーズに応じてくれるからこそ、参加する私たちもやる気になる。何より「学びたい」との欲が湧く。それが満たされるゆえ自然と「楽しい」という感情がわいてくる。今回鈴木先生の報告をきいて、私自身毎月の研究会が苦でなかった理由がはっきりした。ラウンドテーブルという場で、自分たちの研究会の概要を聞くなど、そう頻繁にあることではない。私の立場は院生なので同僚と言えるかは分からないが、それでも同じ現場で実践研究を共にしてきた一人として、堂々と発表される先生の姿を拝見できたのは素直に嬉しかった。

以上先生方の発表を簡単にまとめたが、こうして筆を進めているうちに「教師は、人（生徒や同僚）と共に楽しさを求める（べき）仕事」という考えが生まれた。どんなに辛くても、いや、辛く厳しい職業だからこそ楽しさを追い求め、目指すべきなのかもしれない。しかしこれは一人では難しい。かならず人が居て、その人に本音をぶつける、そのような機会を設ける事で辛さも楽しさを共有する事ができるのではないだろうか。

「生徒は先生の移し鏡である」と言う言葉がある。今回のラウンドテーブルでもこの言葉を耳にした。本当にその通りである。教師が生徒に与える影響は大きい。良くも悪くも。だからこそ、この言葉を胸に刻み、教師としての役割や仕事を見直す必要があると感じた。その一つが、「楽しさ」。私たちが充実感を求め、楽しそうに人と接すれば、きっと何事もプラスに働くに違いない。

実践研究福井ラウンドテーブル 2015

spring sessions に参加して

スクールリーダー養成コース平成26年度修了生／福井大学附属中学校

永廣 裕子

毎年、参加者が増えるラウンドテーブル。今年も約700名を超える参加があり、いろいろな方と交流する機会に恵まれた。私も回5目の参加であるが、中には、前回同じテーブルになった東京の大学院生の姿も見られ、これからの教育を担う世代が多く集まっていることに頼もしさを感じ嬉しくなった。

まず、1日目のSession0では、『知識社会の教師の資本』の著書であるボストン・カレッジ教授のアンディ・ハーグリーブス先生の御講演、並びに学習院大学教授の佐藤学先生、東京大学大学院教授の秋田喜代美をお招きしてのシンポジウムが行われた。これから知識社会の中で子どもたちの学びをどう展開していったらいいかを、これまでの日本の教育、フィンランドやシンガポールなどと比較しながらお話しされた。知識が高度化し、流動化する社会において、教師も常に新しいことやものに対して見通しを持ち、それに対応できる柔軟性が必要である。また、年齢層が多様な教員組織の中では一人で取り組むには限界があり、組織で対話しながら、協働で成し遂げていくことが大切であると感じた。

Session I では、現在勤務している附属中学校の研究組織についてポスターセッションを行った。また、今回初めて本校2年生の学年プロジェクト実行委員が、これまでの総合的な学習の時間で追究している“笑い”について発表した。1年生からどのように追究してきたのか、どのようなことを学んだのかを発表した。質問されたことにも自分たちなりに誠実に答えている子どもたちに感心した。自ら取り組んだ成果と課題をありのまま発表するのは大変新鮮であった。福井市の安居中学校や藤島高校の生徒も参加しており、次回は子どもたち同士が話し合う機会も持てたら、さらに意義のあるものになる気がした。

続いて、Session II のZoneAでは学校というテーマで、『子どものこと、授業のことを語り合える組織づくり』について、学校改革、授業改革の実践事例を手がかりに共に考えていった。教師は常に多忙であり、ストレスを抱えている。また、教師の年齢の格差、学級・学年・教科の壁がある中で、何が教師のやりがい、喜びになるのか。それは、「子どもたちの育ち」である。「子どもが楽しい」と思えば、「教師も楽しい」と感じるのである。長野県の中野小学校、至民中学校、石川県の金沢大学附属高校の実践からも、様々な課題を克服し、教師が組織となって改革することで学校、子どもが変わっていったことが報告された。様々な世代の教師間で、コミュニケーションを取りながら“喜び”や“やりがい”を見つけていく。学校を変えるのは、並大抵のことではないであろう。しかし、子どもたちが「学校を楽しみ」と思ってくれることを願い、改革していく取り組みに大変感動した。

2日目は、教職大学院でまとめた長期実践報告書をもとに、これまで附属中で学んできたこと、理科教員としての意識の変容と今後の展望について報告した。

同じテーブルの早稲田大学の中川翔太さんは、模擬選挙をきっかけとして試行錯誤しながら子どもたちとともに活動した取り組みについて報告された。小学校で卒業アルバムのタイトルを決める際、みんなで理由を挙げながら協働で一つのものに決めていく取り組みは、簡単なものだが中学校でも実践できると感じた。岡山市立光南台公民館の社会教育主事の片山みさんは、公民館を拠点として中学生との関わりについて報告してくださった。部員数が少なく存続が難しかった中学校の吹奏楽部に、地域の人たちが加わり音楽を通して交流する姿などを語ってくださった。公民館がコーディネーターの役割を担い、地域と学校と子どもをつないでいく。いろいろな課題を乗り越えながら、子どもたちを育む姿が伝わった。

毎年、このラウンドテーブルに参加すると、教育は学校だけが行っているのではないことに改めて気付かされる。いろいろな方が子どもたちを温かく見守り愛情をもって育てていることを実感する。普段、子どもたちと過ごしていると、残念ながらそのような気持ちを忘れかけることがある。教育の一番大切な子どもたちへの愛情に再度気づかされ、日頃の自分の姿勢を反省させられた。

今回のラウンドテーブルでも、新たに新鮮な考えや取り組みに触れ温かい気持ちになった。そして、「また明日から笑顔で頑張っていこう」というパワーをいただき、明日につながるものとなった。



2014年度 教師教育改革コラボレーション報告書 ラウンドテーブルの広がりと深化

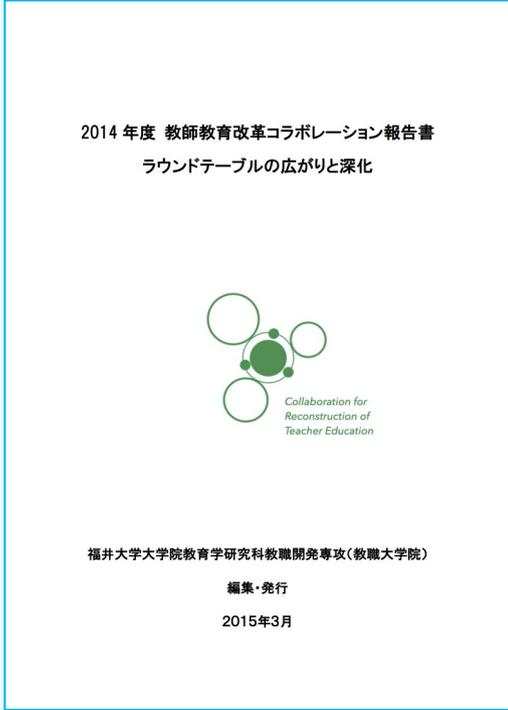
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
(教職大学院) 発行

2015年3月

福井で大学教職大学院は学校を基盤とした教師教育の実現をめざし、「学校拠点方式」による教育課程の編成を採用している。教師の専門性は個人研鑽だけで培われるものではなく、むしろ、学校の中に「専門職の学び合うコミュニティ」を構築することで育成されると考えるからである。つまり、学校改革のための大学院である。これを実現するためには、大学院授業の中心を学校に移し、学校の活動リズムに合わせつつ、入学者の公務分掌を支えながら組織学習を展開していくことになる。したがって、現職教員院生は休職しない。教師の専門性の高度化を今後進めるにあたっては、現職教員が休職しない大学院が必須である。休職する仕方では、国家財政が逼迫する中で、自ずと派遣数に限りがあるからである。

一方、学校を基盤とする教育課程に関しては、校内研修（もしくはOJT: On the Job Training）とどこが違うのか、といった指摘がある。本学教職大学院では、同質性の高い参加者からなる「日々の省察的実践を支えるコミュニティ」から異質性が高い参加者からなる「長期の省察的実践を支えるコミュニティ」まで、多様なコミュニティを準備する分散型コミュニティにすることで、OJTの限界を乗り越える教育課程を準備している。

ところで、学校を基盤とした教師教育を実現していくためには、1大学1都道府県にとどまっていた意味がない。また、県内外の教師・研究者・他の専門職等からなるより異質性の高い「長期の省察的実践を支えるコミュニティ」、つまり「ラウンドテーブル」を開こうと思えば、当然であるが多くの大学や教育委員会との連携協働が欠かせない。さらに、学校を基盤とした教師教育を日本に定着させるためにも、多くの大学や教育委員会との連携協働は重要となってくる。本学教職大学院では、文部科学省の平成25・26・27年度事業「グローバル社会に必要な教師教育の革新をスピーディに実現する連携事業の推進」を受け、学校を基盤とする教師教育を実



現するための「教師教育改革コラボレーション」を設置した。「教師教育改革コラボレーション」には教職大学院をもつ大学、教職大学院未設置大学、私学、教員養成課程をもたない大学等が参加している。なお、教職大学院の担当教員の養成を推進するために、いわゆる研究者養成の大学も「教師教育改革コラボレーション」に参加している。これは、徹底したケーススタディを中心とする専門職大学院の教員養成を行っている大学が存在しないからである。

「教師教育改革コラボレーション」がまず手掛けたのは、各地域で展開している学校を基盤とした教師教育の実践をじっくり語り聴き合う「ラウンドテーブル」を全国各地域で開催することである。本報告書は、平成26年度に開かれた「ラウンドテーブル」事例を紹介する。学校において地道で着実に進める必要のある授業改革の取組は、一方で「ラウンドテーブル」のような広範な公的空間が用意されてはじめて実現するものである。本報告を手にとられた方の「ラウンドテーブル」への参加を期待したい。(松木 健一)